



僕と彼女の
インベンション

はじめに

2014.11.16 から2015.4.19までの連載のまとめです。
よろしければ、バックナンバーも読んでやってください。

ー 僕カノシリーズ ー

- 「僕が彼女に殺された理由（わけ）」 <http://p.booklog.jp/book/31906>
- 「僕と彼女の選択の事由（わけ）」 <http://p.booklog.jp/book/35498>
- 「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった」 <http://p.booklog.jp/book/36101>
- 「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」 <http://p.booklog.jp/book/36617>
- 「僕と彼女と複雑な関係者たち」 <http://p.booklog.jp/book/37238>
- 「僕と彼女と単純な関係式」 <http://p.booklog.jp/book/37731>
- 「僕と彼女と校庭で」 <http://p.booklog.jp/book/38409>
- 「僕と彼女と校庭で 夏」 <http://p.booklog.jp/book/38977>
- 「僕と彼女のエリア」 <http://p.booklog.jp/book/46524>

で、なんでハンバーガー屋なわけ、蓮さん。

「そんなちっこいのでいいの？ ビッグ何とかとか、ダブル何とか頼めばいいのに。」

いや、あのね、

「晩ご飯前におやつ食べちゃダメ、とか言われなかった？子供の頃。」

「そうだけどさあ、、、」

何が不満ですか。

「ほら、景ぐらいの男の子って、もっとガツガツ食べるんじゃないの？

3時間目のあとの休み時間に早弁したりとか。私、女子高だったから、実際に見たわけじゃないけど。」

そういうのは、

「野球部とか朝練とかあるクラブのヤツは、10時ぐらいになると、

死ぬほど腹減るらしいけど。陸上って、基本そういうガツガツっての無いよ。」

「そんなあ、お姉さんが折角おごってやるって言ってるんだから、ポテトもLとかスーパーLとか。」

殺す気か！

つか、蓮さんドリンクのストローくわえてるだけじゃない。一人だけばくばく食べてるのって、なんかなあ。自分もなんか食べればいいのに。

「そんなのばっか食べてたら、余分な脂肪がついて走れなくなるの。」

「そういう優等生っぽいところが、景の面白くないところだよな。たまには、ハメ外せっていうの。」

優等生っぽいんじゃなくて、優等生なんです。

「んで、その優等生の景ちゃんが、なんであんな顔して駅前うろついてたわけ？」

蓮さん、こんな店でマジ人生相談？

「んー、血かなあ。遺伝なのかなあ。」

誰の？

、と、なんだかんだ言いながら、食ってて口で喋れないところがつらいところ。目で訴えかけてみる。

「うちの母さんがさ、私が家に帰る度に、とても食べきれない量のご飯用意して待ち構えてるんだよ。なんか、その気持ちがちょっと今、分かった気がした。」

ははー、僕にはわかんないけどね。

「駅前うろついてたっていうか、帰りみちだし、そのまま帰るだけだったんだけど。」
そうじゃないだろー、って顔。

「あのさ、どっちかって言うと、あの日みたいな顔してたんだよね、さっき。」
あの日って？

「去年の夏前。景が一度あの世に行っちゃう前の、最後の日。ラ・メールに来た時の顔。」

ああ。

ああ、そっか。そんな顔してたのか。

「そんな、深刻な話じゃないんだけど。ちょっと、うーん、、、なんだろ。」
なんだったんだろうなあ。

「部活が早く終わったんで、千冬誘って帰ろうと思ったんだけど。お茶部のみんなと楽しそうに話してるの見たら、なんとなく邪魔しに行くみたいな感じがして、ってところかな。

割り込みずらいっていいのか、話しかけずらいっていいのか。

自分でもなんで引返すのかよくわからないんだけど、、、でも、僕自身には、よくあることだったし。人はあまり、そういうこと気にしないんだろうけど。まあ、僕は仕方ないっていうか、、、。」

「そういうの、なんとなく分かるけどね。」

そうなの？

「あたしの高校生までの生活って、そういうの多かったんだよ。小中高一貫の私立のお嬢さん学校だったから、周りはちゃんとした家の子達だからね。」

ちゃんとした、って言うの、どういう意味？

「景には話してなかったっけ。

まあ、べらべらと喋るようなことじゃないんだけど、あたしって私生児なんだ。学校では殆どの子はそんなこと知らないから、あたしが一方的に気にしてたってだけなんだけど。」

ふーん。僕なんて親が誰だか、いまだに分かんない。

「白羊の群れの中の、黒ヤギみたいな？」

あ、なんだろうこの間。不味いこと言ったかな。

「その例えはよくわかんないけど、まあ、そんな感じ。」

それなりに、蓮さんのアフロじゃない頭にも見慣れてきたな。つか、もう前のアフロ思い出せない。人より記憶力はいいはずなんだけど、こんな風に塗り変わっちゃうと、わからなくなるもんだな。どんぐりの帽子みたいなショート。

基本的に、あまり普通のカットにしない人なんだな。

蓮さんは、ジンジャエールとクラッシュアイスが入った紙カップを左手に持って、ストローを口の端で加えるように吸っている。それって、癖なんだろうか。それとも、何かのポリシーとかおまじない？

人って、妙なところが気になったりするよね。

「馴染めないってというか、クラスの中に溶け込むってこと自体が、もう至難の技って気がしてた。そんなのもあって、美術室に入り浸ってたんだけど。美術の先生が、いくらでも使っていていいよって言ってくれてたから。」

ふーん。

でもそれって、毎年そういうのがいるんだよ、きっと。

「友達は？」

「いたよ。」

そういえば、そんなことも言ってたな。絵が上手いって、褒めてくれる友だちがいたとかなんとか。あれって、そうそう、千冬をモデルに絵を描いているときだった。

「最近、”昔一緒にのクラスだった、何とかだけど”ってよく言われる。

あたしもちょっと名前が売れたかなあ、なんて思うけど、こっちはよく覚えてないんだよね。その頃は、殆ど誰にも見向きもされなかったし、しゃべることも無かったからね。」

いや、多分そんな事ないと想う。

みんな意識してて、でも近寄りがたくて、遠巻きに見てたってというのが正解じゃないかな。でないと、いま存在を覚えてすら居ないと思う。

サラリーマンが、腕に上着を引っ掛けて、半ば怒ったような顔で通り過ぎていく。電車から降りて、改札を出て、少し冷えた身体がもう汗をかいてるってところかな。

その点、僕と同世代たちは潔い。シャツが汗でべったりくっついてても、髪の毛が頬にくっついてても、だから何なのって感じで、鞆を斜めに引っ掛けてずんずん歩いて行く。ま、全員が斜めがけしてるってわけじゃないけどね。

塾に行くっぽい小学生。わりと年嵩な母娘ずれ、は、ずっと話しながら歩いてる。家出てから帰るまで、ずっと喋ってるんだらうな。女の人って、よくあんなに話すことがあると思うよ。ちょっと買い物に出かけて、道端でだべってたおばさんたちが、帰ってきた時まだそこに立ってたなんてこと、珍しくもないもの。

みんな忙しそうだなあ、もうこんな夕暮れなのに。

もう6年ぐらいしたら、僕もあんなふうになんて歩いてるんだらうか。想像つかないな。自分がまともに会社勤めしているところ。

蓮さん、半ば無理やり誘った割には、あまり喋べんないんだ。

何なんだかなあ。

だからかなあ、誰かと一緒にいるんじゃなくて、一人で誰かを見ている気楽さを
久しぶりに思い出した。

「あたしとおんなじだな、景は。」

なにが。

「見ず知らずの他人の中に、ぽつんといるのが好きなところ。そのくせ、誰も居ないと寂しくて死にそうぐらい、人が好きなところ。」

「そうなのかな。」

そういうことって、自分ではあまりよくわからないな。自分がどんな人間なのか、なんて考えたこともない。

人付き合いは苦手。でも、人が嫌いなわけじゃない。

そこは、蓮さんの言うとおりにかもしれない。

でもな。

今まではそれでいいと思っていた。こんなんだから仕方が無いって。長距離を走り出したのも、きっとそんな理由なんだ。誰も追いつけないスピードで、誰もたどり着けない遠くへ走って行く。瑞江さえも。

でも、、、どうしたんだろうな。

「あたしって、つくづくだめだなあ。」

な、なんだ突然。

あ、今日はちゃんと口紅ひいてるんだ、、、ちゃんととか、失礼だな。
はは。

「自分でなんとか稼げるようになって、一人前になったつもりで。お姉さん風吹かせて景をこんなところに引っ張り込んだ割には、まともなことなんにも喋れない。」

「僕は、蓮さんにそんなこと期待してないけど。」

「あ、この野郎。面と向かって言うかなあそういうこと、、、そうなんだろうけどさ。」

ドラマなんかだと、いいシーンなんだろうな、ここって。でも、あの、調理機械のピロリ、ピロリ、っ言う変なメロディが片っ端から雰囲気を砕いて行ってくれるよ、まったく。

「あたし、アメリカに行くかも知んない。」

「えっ、そうなの？ いつ？」

「景、寂しい？」

なんだ、その微笑みは。からかってんのか。

「うーん、別に行きっぱなしってわけじゃないんでしょ。だったら、そんなに寂しいとか、、、。」

「ラフィエットってオッサン覚えてる？」

「うん。」

何で今頃あのくそオヤジの名前なんか。

「彼がアメリカに来ないかって、誘ってくれてるのよ。向こうのアートスクールに入って絵の勉強をするの。もちろん奨学金つきでね。だから2、3年は向こうで暮らすことになると思う。」

へえー、、、なんだろう。頭の中がなんか、ぼーっとして上手く言葉が出て来ない。

「帰ってくる頃には、景はもう大学生だなあ。東京の大学に行くんだっけ？」

「いや、それはもう止めたんだけど、ああでも、行くことになるのかな。」

何言ってるんだろ、僕。

「でも、なんでいまさら。蓮さんの絵、引くあまたなんじゃなかったっけ。」

「景にはわからないと思うけど、絵描きにも2タイプあってね。描いても描いても、描きたい物がつきずに湧いて出てくると、そうじゃないの。

あたしはどっちかって言うと、後者なんだよ。何かを注ぎ込んでやらないと、枯れてしまうんだ。」

”枯れる”？ 芸術家の考えることは、わかりません。

「それがアメリカへ行く理由？」

「そう、、、だと思ってた。」

”、、、だと思ってた” ？

「家に帰って母さんに話したら、”お父さんの血ね”って言われた。

親としての顔を見たことの無い人の血が、あんたにも流れてるのよって。
あの人、私の顔見て、自分を置き去って行った男のこと思い出してたんだ。
あたしって、どんだけ親不孝よ。」

「そんなこと無い！」

しまった、つい大声出した。周りのどん引きと、キモいって言う視線が
、、、そしてあのピロリ、ピロリって音がする。

「景。」

、、、ごめん蓮さん。

「ごめん、言葉足らずで。別に自分を卑下してる訳じゃないから。

この話したとき、母さん満足そうだったんだ。きっと、以前は色々
あったんだろうけど、笑って背中を押してくれたんだよ。稼いだ金で
温泉に連れて行って、おねだりされちゃった。だから、あたしも嬉しかった。」

「ごめん、、、早とちりで。」

恥ずかしい。

「景は、周りの人間のことばっか考えてるからなあ。お姉さんはそれが
心配だよ。景が傷ついたとき、誰が慰める。あたしがいなくなったら、
誰が景の背中を抱いてやるんだって。」

「そんなこと考えてたの。」

「千冬には無理だよ。あの子は、、、なんていうか、母親って言うのを
知らない気がする。彼女は優しい子だと思うよ。景を見ている彼女からは
それが伝わって来る。でも、景もそんなことは期待していないと思うけど、
庇護するような優しさじゃないんだ。」

それは、瑞江かもしれない。

僕がいつも我がまを押し通して、泣かせているのは瑞江だ。放課後の
中学の校庭を、いつまでもグルグルと一人で走っていたのは、彼女が
見守っているのを知っていたからだ、、、きっと。

「僕はもう子供じゃないよ、蓮さん。」

「ふふっ、こういうのには、大人も子供も無いんだよ。

でも、そうだな、あの子がいるのか。去年の夏休み前とは違って。ということ、あたしも安心してアメリカに行けるってわけだ。」

そうか、蓮さん。そんな遠くに行っちゃうんだ。

15分ぐらいは店に居たんだろうか。

駅の前で分かれて、本当にアメリカに行く前に送別会ぐらいはしないなあ、なんてことを改札機に定期券を通しながら考えて。

人って慣れてることは、無意識でも間違いなく出来てしまうんだな、なんて妙なことに感心した。

芸術っていうのは、僕なんかの想像もつかない深淵から生まれて来るらしい。

蓮さん自身は、何かのインプットがあって、そこから絵が生まれてくるんだって言ってたけど、それは何となく僕が理解していることとは、また違うんだろうな。

写真見て、それを絵に変換する、、、なんてことを言っているのとは違うんだろう。

一人で電車に乗ること自体は、そう珍しいことじゃ無いんだ。ドアのところの持ち手にもたれて、見慣れた風景が流れて遠ざかって行く。もう何度も繰り返して、経験してきたこと。

秋だからかなあ、、、。いや違うって。自分で吹きそうになった。

瑞江が自分の未来をリアルに考え始めて、千冬が僕の居ない自分の世界を持ち始めて、ま、当たり前のことなんだけどね、それ自体は。蓮さんがアメリカに行くとか、、、。

なんだか、置いてけぼりになったような気分にもなったかなあ。

もと母さんの時もそうだったのかもしれないけど、あの時と違うのは、そういうことを少しは客観的に見られるようになったかな。
"客観的"とか、ちょっとカッコつけ過ぎかも。

— ひまわり、まだ咲いてるんだ。

"客観的"とかじゃなくて、単にパニックらなくなっただけか。あの黒い

イメージ。暫く見てないな。

— もう刈り取ってある田んぼが有るんだ。じゃあ、そろそろスーパーにも新米って並ぶのかな。でも、あれって、秋田産とか北海道産て言うのは良く見かけるけど、このあたりのお米って、見たことが無い。どこで売られてるんだろう。

中学生の時は、いずれこの町を出るんだと思って、そのための手段として高校は進学校に入るって目標を持ってたけど、今の僕には2年後に何をしているっていう、イメージが全く浮かんで来ない。

結局それを先延ばしにする為に、大学に進むんだらうか。

まったく、それって、どうしようもない話だな。

瑞江は例の東京行きの話、もうご両親にしたのかな。

僕は”巻き込まれ当事者”なので、その結果を進んで承りに行く気になれなくて、あえて事を荒立てないようにはしているんだけど、、、ちょっと音沙汰なさすぎ。

きっと上手く行ってないんだろう。だとすれば、原因は十中八九、オジサンだな。愛娘が相次いで家を出て行くって言うんだから、きっと反対してるんだろう。

みんな自分の進路ってどうやって決めて行くんだろうな。クラスのやつらとか、鴨中と一緒に卒業したやつら。みんなどうやってこれから先のことを決めるんだろうな。

一 日が沈んで行く、のを見てたら、なんとなく唐揚げが頭に浮かんだ。なので、今日の夕ご飯は、唐揚げにしまおう。

晩ご飯のオカズとかだと、案外すぐ決まっちゃったりするんだけどなあ。おっと鴨田だ、乗り換えないと。

なにぼーっとしてんだ。

この時間でも、普通電車ってすいてるんだよな。これから寒くなって行くっていうのに、鴨田の駅で何分か、ドアを開けて急行を待ってるんだ。

電車の中で待ってる方はたまらないかも。急行の方は混んでて、冬場でも汗かくぐらい暑くなってるときがあって、そういう時は寒いぐらいで丁度いいんだけど。

電車だけじゃなくて、もう何回も乗り換えて来たんだなあ。

竹田はずーっとサッカーやってきて、これからもずっとやっていこうし、シンジは自覚無いみたいなポーズだけど結局は家業の酒屋を継ぐんだろう。

僕なんか、取り柄と言えはちょっと足が速いってことぐらいで。それにしたところで、それで競技者を目指すとかいうには根性が足りてない。

今のままじゃあ、大学を受験するにしても学部すら決められない。本当に、真剣に考えないと、、、だよな。

はあ、、、着いたか。

鍵を開ける音。続いてガッチャン。帰って来た。

「ただいまあ。」

つか、新鮮かも。

大抵一緒に帰ってるから、千冬だけが帰って来て “ただいま” とか言うのを聞くと、なんかいつもと違う気分になる。突き指して右手が仕えなくて、仕方なく左手で体を洗うとき見たいな。

廊下を歩くスリッパの音。

「おかえりー。」

わ、なんか不審顔。というか、ちょっとお咎めモードの眉毛？

「ねえ、どうして先に帰っちゃったの？ 1年生に聞いたら、”来て、お茶して行きましたよ。ピロティ行ったんじゃないんですか”とか言ってるし。なんだか、定期巡回コースお散歩中の猫みたいに言われてたわよ。二年で文化祭の打ち合わせしてたんだから、早く終わったんなら景も出れば良かったのに。」

「その打ち合わせに、途中から顔を突っ込みづらかったんで先に帰った。」
なんて言える分けないな。
んーと。

「お茶する？ 紅茶？」

「は一。」

そのため息が恐い。肩が怒ってませんか。
「話はぐらかさないの！ ついでに紅茶。」

なんだか、闘牛場に放り込まれた新人マタドールの気分になってきた。
華麗に牛を捌けるか、それとも角に突き上げられて、地面に叩き付けられるか。

「ちょっとCD屋さんに寄りたかったんだよ。暫く行ってなかったから、

特に何か買うという感じでもないんだけど、ざっくり見て回るみたいな。」

はい、紅茶。

「にしたって、声かけてくれれば良かったじゃない。わたしは、いつも運動場まで行ってるよ。」

だから、僕も一応しようとはしたんだって、、、紅茶で機嫌直してくれないかなあ。

あ、怒ってても飲む時は座るんだ。筋金入りの上品さだな、まったく。

「ごめん。今後はそうする。」

飲んでる間は、お小言はないんだ。

「嘘ついてない？」

うわー、するどいー。やなおんなー。

「うん、、、あ、そうだ。駅前で蓮さんにあった。」

「え。」

何、その、ちょっとばかり不意をつかれたって表情。

「バーガー屋に連行されて、バーガーとポテトとコーヒーを無理矢理注文させられたんだけど。」

「それで、何か話した？」

普通なら、夕食前にそんなもの食べて、バカじゃないのっていう展開になるところだろうけど。

慌てるなよ、僕。

上手く話がそれたのはいいんだけど、さっきの事に絡む部分は慎重に外して、矛盾が無いように話をつぎはぎしないと。でないと、千冬の完璧な記憶と、読書量によって培われた筋を読む力で却って状況が悪くなりかねないからな。

「蓮さん、アメリカに留学するんだって言ってたよ。あのテンガロンハットの、くそオヤジが面倒を見るとか言ってるらしいんだけど。何か知ってた？」

あ、知ってたんだ。さすがお姫様。

「少し前に、寺島さんから連絡が有って、知ってはいたんだけど。景にはいずれ言うつもりで、暫く先延ばしにしてたの。」

「ふーん。どうして。」

・・・しばし沈黙。

「動揺するんじゃないかと思ったから。それと、わたし自身がこの件の処分を決めかねてたのもある。」

驚いたけど、動揺はしなかったな。その理由は、、、千冬には言わない方がいいな。

「処分て、、、蓮さんはもうアメリカに行くつもりで、お母さんにも話したって。」

「そう、、、。」

・・・またしても沈黙。

いつも即断即決、躊躇なしの千冬にしては意外な展開。

「何か、問題でも。」

「うん、、、。」

と言いつつ、話しづらそうだな。

そっか、話しづらくて先延ばしにしてたんだから、言いにくいのは当たり前のことか。どうも僕絡みらしいけど、、、だから機嫌が悪かったのかも。

僕絡みで心配事がかかえているのに、僕が気ままにしているから。そりゃ、こいつ何してくれてるんだ、ってなるよなあ、普通。

「バンメシ、もうすぐ出来るけど。食べよっか。今日のおかずは、」
「唐揚げでしょ。ドア開けた瞬間に匂いで分かったよ。男の子って、ハンバーガー食べたあとに、唐揚げなんて食べれるんだ。」

何言ってるの。

「全然オッケー。酢豚でも大丈夫。」

「信じられない。でも、あれだけ運動してたらいやでも消費してしまうよね。わたし最近、体重計が恐くって。」

あ、お茶碗とお箸よろ。

唐揚げとレタスは、まとめて盛り鉢でいいよね。

「太ったの？」

「失礼ねえ！ 太ってません。わたしは頭でカロリー消費する派だから。」

そういえば、昔、午前中に糖分とらないと、頭がぼーっとして来るとか言ってたな。小学校のときだったっけ。

確かに、脳ってカロリーを消費するって言うけど、そういうダイエット法なんて聞いた事無いぞ。

ん、何止まってるの。

「ねえ、景。ご飯、スイッチ入ってないんだけど。」

「えっ、なんですと。」

七言絶句、、、違うけど。

今日の僕、やっぱりどうかしてる。

平安時代に食器洗い機があったら、清少納言はどんなふうにした
だろうなあ。

あの、何事にも比較のしようがない悶々とした騒音で、食後の怠惰と
等価な引き換えになっているのか、どうにも気になるんだよね。

おそらく、容赦無しの手加減無し、って感じでこき下ろすんだらうなあ。

でも、うちの姫は、手があるのは困るって言うし。ま、それも分かるし。
ちょっと特別な立場の人だからな。手荒れ姫なんて、やたら教訓めいた昔話
でもなければ出て来ないだろう。

それに加えて、教訓めいた昔話なんていうのは、全部改変された偽物だ。
人生訓なんて言うのが世の中に出てくるのは、教育によって庶民を調教しよう
なんて考えだした明治以降だからね。○宮○次郎なんて、何が面白いんだか。

「さてと。」

はいはい、と。なんで紅茶なんだらう。日本茶でいいじゃん。

「私が決めかねているって言うのは、いろんな要素が絡んでいて、上手く
解けてくれないからなのよ。」

それは、大抵そういう物でしょうとも。

ん、まさかそれで紅茶にしたんじゃないだらうな、このミステリーの女王
気取りが。

「さっきも言ったけど、蓮さんがボストンに行くのは賛成。そこはボストン
じゃなくて、ミラノでもロンドンでもいいんだけど。もう目の前で、あの
鬱陶しい小芝居を見ないですむと思えば、本当にせいせいする。」

そりゃあんまりですぜ、お嬢さん。

「一方で、わたしは、あの男を信用していない。一応脅しは効いているみたいで、
あの私たちの秘密を吹聴するようなことをしていないことは確認出来ている。
でも、それが今後も続くかどうか、は分からない。

多分のど元を過ぎれば、熱さを忘れるタイプの男だらうから。いつまでも
大人しくしていないと思っておいたほうが正解。」

「でも、ラフィエットの日記とかその他の関係書類って焼却破棄したんだから、あのオッサンが何を言ったところで、よくある幻想もの以外の何ものとも思われないうらう。」

「確かに、全てをこの世の中から消してしまったらね。でも、まだ残ってるでしょ。」

「なに？」

あの時、、、綺麗さっぱり掃除したはずだろう。寺島さんが、だけど。

「わたしと景が、その一族の者だという事を、あの男は知ってる。」

あ！ そうか。

「わたしと景が居る限り、我が一族の秘密への鍵穴が、残っていることになる。」

「じゃあ、やっぱり、、、。」

「いいえ、それはしたく無いの。景にそれをする時までは、そのやり方に何の疑問も持たなかった。というより、それが唯一の解決方法だって信じていたぐらい。

でも、なんて言うのか。今はどっちかって言うと、疑問を持っている。」

「そうなんだ、、、。」

「そういう前提を置いた上での事なんだけど。どうして蓮さんをボストンに呼ぼうとしたのか。他の日本人ではダメなのか。たまたま運良く飲み屋で知り合った画家の卵が、思いもよらないブレイクをしたから？なのか。」

「そうじゃないの？ 偶然、たまたま。それが真実だとしたら、ご都合のいい話だなと思わなくもないけど。でも、あのオッサン自身が美術には一般以上の関心が有ったからマッチングした訳で、そういう意味では、本当の偶然よりは出会う確率は高かったと思う。」

「おそらくはね、そこは景の言う通りだと思う。彼は、蓮さん以外にも何人かの画家なり画学生と会っていると思う。とすれば、蓮さんは選ばれたわけ。何かの理由で。」

とすると、

「才能？」

「そんなの分かる訳無いでしょ。」

「じゃあ、、、。」

「本当の理由なんて分からない。本人に聞かない限り、単なる当て推量に

しかたがない。でもわたしが考えないといけない事は、はっきりしている。」

だめだ、千冬の頭の回転に全然ついて行けてない。

「それは”わたしと景にとって、不利益になる事は何か” ということ。」

、、、年下で良かった。もし僕が年上だったら、自分のあまりの間抜けさに落ち込んでたかも。

「ラフィエットが、身の安全を確実にするか。もしくは、自分の妄想を世間に公表する時の身を守る盾。いわゆる人質として、彼女をボストンに呼び寄せるのかもしれない。海の向こうの出来事なんて、コントロールしようがないもの。それが今のところ、私たちにとって最も都合の悪い動機になるわ。」

なんだろう、今日の彼は。

話しても話しても、まるで手応えが無い。

気もそぞろとか、心がここにはないとか、そういう感じではないのだけれど。まるで答えが返って来ない、そんな気がする。

ラフィエットの件について、彼の意見を聞きたいとかそういうことはないのだ。

何のイニシエーションもしていない、たかだか17歳の高校生に答えが有ると思っていない。わずか2歳の違いだけれど、何度も何度もわたしは決意を積み重ねて此処まで来た。

だから実年齢の違い以上に、景とわたしは覚悟が違うと思っている。

けれども、彼が”ここにいない”という状態が、わたしを不安にさせる。

「でも、蓮さんはもう行くつもりなんだと思うよ。」

「ええ。だからそれは構わないの。さっきも言った通り、わたしもその方がいいと思っている。一人の投資家として、そして一人の女として。」

「ようは、ラフィエットでなければいいのよ。なんならうちの財団から助成してもいいと思ってる。彼女の絵は、それだけの価値を生み出してくれるから。」

「そうか。そういう方法もあるってことか。なるほどね。」

なんだろう。この歯ごたえの無さは。

「でも。わたしからラフィエットの誘いに乗るを止めるようには言えない。」

「どうして？」

「”どうして？”って言われたとき、その理由を言うわけにはいかないもの。」

「さっき処分を考えあぐねているっていったのは、その一手が打てないから。結果が見えているのに、そこに至るただ一手がわたしの手の中じゃないの。」

「でも、傍観し続ける訳にも、、、。」

「そうね。最後は強制送還でもなんでもしてやるわ。でも、そうはならないことに期待して、暫くは成り行きを見守る事にする。」

それに、これ以上この話を続ける気もない。それよりも、今日の夕方の方が余程気になる。上手く話をはぐらかしたつもりかもしれないけど、わたしの脳は、気になる事はそう簡単には忘れてくれないの。

「で、景。どうして帰っちゃったの。」

はあ、、、まったく、なんて顔するの。それじゃ、わたしがいじめているみたいじゃない。そんなに話題にたく無い事っていったい何！

「いいたくないの？」

なんだか、だんだん腹が立って来た。

これ以上顔見てるの、今日はもう、ちょっと嫌かも。

「いいわ。もう聞かない。」

なにか悩んでるのかなあとか思って声かけたんだけど、結局お茶して終わっただけだった。やれやれ、思春期の男の子なんて、、、あたしには向いてないのかね、人生相談なんて言うのは。

薄暗い照明。途切れる事の無いジャズの響き。おしゃべり、笑い声、食器がぶつかる音、フライパンを振る音。

今夜も客多いなあ、この店。あたしが辞めてちょっとは客足減るかと思ったけど、、、ははっ、思ってないけどね、、、そんなに広い店でもないんだけど、夜のこの時間帯は、マスターとバイトの2人だと結構きついよなあ。

マスター、なんか体育会系のスポ根ものと勘違いしてんじゃないんだろうか。このきつい時間帯が無いと、やった気がしないとか。

「ねえ、キリ。ちょっと手伝おうかー。」

”へえー、久々に蓮ちゃん登場？”

”いいねーそれ。こっちに来てビール注いでよー。”

”ばかやろー、うちは風俗じゃねーって何度言ったら分かるんだ。”

客に馬鹿って言う店って、あんまないよねー。

”蓮。メシおごってやるから、ちょっと手伝えやー。”

「へーい。」

文無しで食い逃げを企んでるガキじゃないんだけどね。

”れんちゃん。”

へいへい、と。伝票と鉛筆はどこだったかなあー。よっこらしよ、と。

「お待ち。」

「ワイルドターキー」

「僕はねえ、ハイボール頂戴。」

「はいよ。」

目の下、あっか。もうだいぶ飲んでんじゃないの？

「蓮ちゃん、絵の方はどうなの？」

「うん。まあ、そこそこ。」

「そうかあ。ここで顔あんまり見ないくらいには、忙しくやってんだろうな
とは思ってたけど、でも、こんな飲み屋からまともな画家が出るとはねえ。」

「オレは予想してたけどな。蓮チャンは大物になるって。」

「おまえの”大物”は意味が違うだろう。」

「どういう意味よ、それ。」

まったく、この酔っぱらい連中は。

「ねえ、蓮ちゃんの絵って、どこで売ってるの？ 家に1枚ぐらい、ホンモノの絵があってもいいかなあとと思ってさ。」

「いやいや、額に入れてはいどうぞ自由に、なんて売るような物じゃないんだよ、あたしの絵っていうのは。」

「え、そうなの？ でも、デパートとかには売ってるじゃない。」

「あれは大抵シルクスクリーンっていう、印刷物。肉筆もあるけど、あたしのはそういう所には出ないで誰かの手に渡って行くの。」

「へー。」

「それにあたしの絵は、あんまりマイホームに飾るような物じゃないから。下手したら、子供が夜中にトイレに行けなくなるかも。」

「何それ、妖怪？」

「あーっはっは、ある意味妖怪かもね。」

妖怪なんて、人間の心そのものだもんな。

「じゃあ、あれは？」

ああ、学生の時に描いて残して行ったやつか。

「ああいうのは、もう描いてない。へったくそで本当は外に出したく無いんだよね。」

でも、此処で過ごした時間と平行世界で描いていたやつだから、ここに残して行くのがいいような気がするな。あれ見ると、芋づる式にいろんなことを思い出すような気がする。

料理の油と、タバコの煙でいぶされて行けば、あの絵も本望だろう。

「蓮ちゃんのは駄目かあ、、、じゃあ、キリちゃんのならどうかな。」

「えー、キリの一。えー！」

キリの絵ってさあ。

「キリー。ちょっとこっち来て！」

「なに。」

「前橋さんが、キリの絵を買いたいんだって。」

「ひえっ！」

ほら、硬直した。

「このど変態！」

わーっはっはっは！

「えーなんでなんで、なんで僕がど変態。」

キリの絵って、同人系のゴスでロリ入ったしっぽのある異世界少女だからなあ。

「あれを学祭に堂々と出した男気には、あたしも関心するけど。」

ああいうのは、同じ嗜好を持った人の内輪で見せるのはいいんだろうけど、ノーマルの他人に見られるのはちょっと、スカートの中見せるようなものだからねえ。

この酔っぱらいのど中年に買わせてみて、唾然とするところも一度見てみたい気もする、、、案外、壺にはまったりしたらそれはそれで悪夢だわ。

二十五時かあ。手伝ってたら早かったなあ。

「マスター、あたしやっぱり、この仕事向いてると思う。」

「そっかあ。じゃあ、オレが引退する時には一声かけてやるよ。」

「それ、何十年先なんだか。」

がっはっは、かあ。

大分お客さんの喋りも落ち着いて来たな。空き席も多くなって来た。この店は、客も含めてみんなマスターのファミリー。そういうの実感する時間帯だなあ。

「キリー、今日はこいつが居るから、もう上がっちゃっていいぞ。」

「はい、じゃあお言葉に甘えてー。蓮ちゃん、あとよろしくー。」

「うーん。ご苦労様あ。」

とりあえず、全部下げて来よう。もう常連しか残ってないし。とっとと追い出すか。

「クロさんまだビール残ってるじゃない。注いだげるからとっとと飲んじゃって。」

「おー、とっと。もうそんな時間？」

「そうだよー。空いてるお皿さげちゃうね。」

「これも、こっちの皿によせちゃうから、持ってって。」

「すみませんねー、お客さん。」

「いってことよ、おねえさん。」

さて、一気に洗っちゃうか。ん、なんだかこの間から洗い物ばかりやってる気が。

ま、いっか。

「蓮。酒にするか？コーヒーがいいか？」

26時かあ。やっとこさ片付いたなあ。昔取った杵柄なんていうけど、
暫くやってないときついわ、この仕事。

「コーヒーにする。今夜はもう結構飲んじゃってるし。キリ、ちゃんとやってる？」

「ああ？」

ふー、豆を挽くいいにおいだ。

「やってるよ。あいつもいまや此処の看板娘だ。お前とは違う意味だけどな。」

「えー、へっへっ、、、どういう意味、それ。」

「コスプレで妙に盛り上がっちゃまってなあ。あいつ、商店街の広報に
コスプレで出やがって。それ以来、時々妙な感じの客がくるんだよ。

まあ、来るやつはいい子ばかりなんだが、頭がキンキラだったり、
ブルーとかピンクも居たな。」

「そのうち、店の前でコスプレ大会とかやるって言うんじゃないの。」

「ほい、出来た。」

「ありがと。うーん、いい匂い。」

「店の前は駄目だっていったんだが、、、どうも商店会と組んでイベント
やるらしい。オレは絶対見に行かぬ一けどな。いま、そういうの流行っ
てるんだと。」

キリやるなあー。もうこの商店街牛耳ってるよ。

あー、このコーヒー久しぶりだあ。といっても、美味しいのかどうなのか、
あたしには分かんないんだけどね。

「で、なんだ。」

うわー、来ちゃった。まだ心の準備があ。

「何って、なによ。」

どきどき。

「久しぶりに来たと思ったら、張り切って手伝いだして、閉店まで居るって
ことは、なんか話あんだろうよ。」

ああ、もう。こんなふうな分かったような大人の笑い顔って大っ嫌い。

くっそー。このままあっかんべーして帰ってやろうかな。

「あの頃は、アフロだったんだよなあ。」

ああー、また店の酒飲んでるよお。

「なんか、分かり易い、歪んだやつが来たなあと思ったけど、思ったより早く卒業できたもんだな。」

ま、いっか。

「あたし、しばらくアメリカに絵の勉強に行こうと思うんだ。」

「ほう。どのくらいだ。」

「多分2、3年。」

「ふうん。結構みじけーんだな。10年ぐらい行ったらどうなんだ。」

「あたし、おばちゃんになっちゃう。きっと旬を過ぎちゃってるよ。」

「画家の旬て、知らねーけど30代、40代じゃないのか。」

「あたしの場合、若さって言うのも売りになってるからね。30になるまでに、もうちょっと実績作っとかないと、あっさり賞味期限切れになっちゃう。」

「そんなに商売が大事か。」

「売れないと、描かしてももらえなくなるからなあ。カンバス代、絵の具代、筆代。馬鹿みたいにお金かかるんだよ絵っていうのは。描きたいものがあるってカネが無くて描けないっていうの、恐怖に近い。」

「そんなもんか。」

「そうだよ。アートなんて、一般人が思ってるほど高尚なものじゃないよ。」

「ふーん。で？なんで？」

そういう順番かよ、、、。

「やっぱ、何か吸収していかないと、マンネリしか出て来なくなるんだよねえ。このままずっと続けてたらマンネリすら出て来なくなる。もうなんとなく、底が見えて来てる気がするんだよ。」

それが何って言うのは分かんないんだけど、環境を変えないと、、、わたしのことを誰も知らない、その場所を何も知らない、そういうところに行きたいんだ。」

「それがアメリカってか。オレも、わけ一頃に日本飛び出して、いろんな国を放浪して、びっくりしたり感心したり、価値観を揺さぶられたり。それが今のオレの土台になってる。今となってはこんな無国籍な料理屋も珍しくは無くなったが、オレが始めた頃は他には無かったんだ。」

日本を離れるっていうのには、「行ってこい」っていうことなんだが、なんでアメリカなんだ？ インドとかヨーロッパとかもあるだろう。」

あ、そっか。あんまし行き先とか考えてなかったなあ。

インドかあ、、、ガンジス川、、、イメージ無いわー、さすがに。

「マスター覚えてるかなあ。ラフィエットってオッサン。」

「ふー、ちょっと待て。外人の客はあんまり来ねーから、、、ああ、あのテンガロンのやつか。」

それ、被ってないけどね。

「そのラフィエットが、面倒みてあげるから留学しないかって誘ってくれてるんだ。ボストンで美術クラブかなんかの理事をやってて顔も広いらしくて、滞在費用とか、学校とかも紹介出来るからって。」

「ラフィエットかー……。」

あー、また店の酒を。しかも、いちいち氷割ってるし、、、言ってくれれば、あたしがやったげるのに。

「そいつは、ノーグッドだな。」

「なんで！」

しかもイカガワしい英語で。

「あいつは駄目だ、信用なんねい。そんなやつところに、蓮を行かせるわけにはいかねえ。」

何を根拠に、このくそオヤジ。

「あいつは大学教授だとか言ってたな。そういうやつが、こんな片田舎の商店街で、ギター弾いて小銭稼いで酒代にしようなんて言う根性が気に食わねえ。そういうのは、それでメシ食って、宿代にして、旅費にするやつだから許されるんだよ。」

小銭を入れてくれる人は、頑張んなさいよって気持ちを入れてくれるんだ。カネも持ってて身分も保証されているやつがそういうことをやるって言うのは、一種の詐欺だ。しかも善意を踏みにじってる。

だから、そういうやつのカネを頼んのはやめとけ。」

まあ、あんまり深く考えずに。外国っていうのに乗ったって言うのが事実なので。あたし自身があのオッサンにこだわってる訳じゃないんだけど。

ちょっと、出鼻をくじかれた感があるなあ。

ちくしょう、このオヤジ。

「お前、2、3年ぐらいなら留学するカネあんだろう。」

「うーん、多分ね。殆ど使ってないから。」

そっかあ、それでもいいのか。あたし、なーんも考えてなかったなあ。

「あたし、英語だめだし根性も無いから、向うへ行って自分で何もかも
しないといけないっていうの、多分無理だろうと思うけど。それさえ
なんとかしたら、、、。」

自費もありかあ。そんな身分になったんだなあ。

「もし足りないんだったら、オレが出してやるぜ。」

えーっ！

「ラビットなんか頼らなくても、オレがなんとかしてやる。」

「何かッコつけてんの。」

「格好付けか。そうだな、格好付けも大人の甲斐性のうちの一つだからな。
いいんじゃないかそれで。頼られてやるぜ。」

はは、いい人だ。ここに来てよかった。

「お金の事と、向うへ行ってどうするかはもうちょっと考えてみるよ。

画廊とか美大のセンセイに相談してみてもいかもしんない。あたし、
今のところ金の卵を産むガチョウらしいから。」

「そうか。それもありかもな。」

話して、ちょっとすっきりした。

「親にはもう言ったのか？」

「うん。でも、創造的な悩み云々よりも”外国に行くのは、お父さんの血ね”
って言われちゃった。あの人、全然わかってないんだから。」

「そっか。そりゃいいな。」

がっはっは、か。

「もうそろそろ、会ってもいいんじゃない、父さん。」

「そうだな、、、オレの血って言ってたのか。あいつ、、、そうか。」

「あたしが向うへ行ってから、”生んでくれてありがとう”って言ってたって、伝えといて。」

「馬鹿野郎、そういうのは自分で言え。」

「面と向かって言えないから、頼んでるんだって。」

なんだか気になるなあ。

もういい、なんて言っては見たものの。良いわけなんてないんだ。

彼は危うい。

例の”黒いイメージ”は、もう最近は見なくなったと言っているけれど、彼の脆さはそれだけではない。人との関わりかたが、何かおかしい。

わたしは、自分のおかれた運命に従って、同族以外の人間とは深く関わらないようにして生きて来た。心は人とのつながりを求めていたけれど、それが義務だと敢えてそうして来たという事。けれども彼の場合は、転校を繰り返したことで、友人関係が希薄になったというのだけれど、それももう6年近く前の事だ。

彼は今日、下級生達の言うとおりに、部室に顔を出したあと、おそらくピロティーには来たのだろうと思う。でもその後なぜか、わたしに何も声をかけずに立ち去ってしまった。

彼と出会ったのが小学6年のとき。そして1年に満たないうちに、わたしは彼の前から去った。そのときも、彼はそうだったのだろうか。わたしは、自分のことで精一杯で、彼のことまで考える余裕は無かった。

、、、再会して1年と少しか。

その間の事をわたしは何も知らない、、、んだなあ。

こうして2人で暮らしているのは、主にわたしが、もう一人でいることに耐えられないからだ。かりそめの父と母は、わたしを抑圧する枷と重荷でしかなかった。彼女達は、”親”というより融通のきかない”養育係”だったのだろう。

そうした彼らと一つの屋根の下で、孤独に暮らす事に疲れ果ててしまったからだ。

けれども彼は違う。彼は長い孤独に慣れすぎて、それに哀しみも痛みも感じない。そうすることで自分を守っている。そこまでは分かっている。

でも、今日のはそれとは違うのだと思う。それを放っておくと、この2人の暮らしもいつか、崩れて行ってしまうと思う。わたしはそれに耐えられないけれど、彼はきっと受け入れるだろう。

だからこのことを、このままにしておくわけにはいかない。

小学生だったあの日の河原で、一人であの事件を受け止めて、耐えようとした彼だもの。

その違うものが何かわたしには分からない。そして、悔しいけどそれが何かを知っている人が、この町に一人だけいる。

”はい、珍しいねえ千冬ちゃんからかけてくるなんて。なにかあった？”

珍しいはともかく、わたしがケイタイするときって、何か事件がないといけない前提？

「いや、そうじゃないんだけど、そうでもあるかも、、、で、今大丈夫？」

”うん。いま、お風呂出たところで、パジャマもちゃんと着てない、、、なんて千冬ちゃんに言っても意味ないね。”

ということは、景にはそんなこと言ってるってこと！ なに考えてるの、この子。

ああでも、景と話し中じゃなくてよかった。普段はわたしからかけるってことし無いし、要件が要件だけに、それなりに心臓どきどきだから。

「ちょっと相談ていうか、聞きたいことがあるんだけど。」

”髪の毛拭きながらでもいい話題？ こっちからかけ直してもいいけど。”

どうして、そう開けっぴろげなの？ こっちからは見えないんだから、パジャマ着てようが、髪濡れてようがどうでもいいでしょうに。

「今日、景の部活早く終わったらしくて、帰りにお茶部によったらしいんだけど、、、。」

”くっそー。”

・・・いま、何と。聞き間違い？

「わたし、2年生部員とピロティで文化祭の打ち合わせやってたの。だから

下級生達は、そっちに行ったはずだっていうんだけど、実際には会ってないのね。」
”よし！”

もう、、、とりあえずスルーね。

「それで、家に帰ってからそのことを聞いたら、嘘ついてごまかしたの。

そこには行ってないって。途中で引き返したっぽい事とか、そのことで嘘ついてることとか、もうなんなんだろうって。」

”はあ、、、それでケイタイしてきたってわけか。ふーん。”

「どういうことか、わかる？」

”うーん、分かるっていうか、、、それ、わたしが原因の一つかもしれない。」

なんですって。

「そんなこたえは期待してなかったなあ。」

”へへー。あ、でも、根本原因でわけじゃないからね。それを解決するんじゃないかって、なんていうのかなあ、、、甘やかしちゃったみたいなの。”

なにが、へへー、よ。

”で、それを教えろって。”

「うん。景の将来を考えた時に、そういうのって良く無いと思うんだ。だから、」

”やだ。”

なに、この子。

「ねえ、ミズエちゃん。”やだ”とかじゃなくて。」

”わたし、そのことでどれだけ苦労したかわかる？ 小中あわせて5年間よ。

それを電話一本でハイ分かりました実はね、なんて言うと思う？”

わたしだって、瑞江に聞きたくてきいてるわけじゃないもの。

「じゃあ、どうしたら教えてくれるの。」

”ええっとね、、、そうだ。東京行きの話って、ケイくんから聞いている？”

例の音大の話か。

「聞いているよ。」

”もし東京へ行くことになったら、ケイクんと千冬ちゃんが一つ屋根の下で暮らすって言うの、止めて欲しいの。”

「今さら？」

”わたし今だって、納得してる訳じゃないよ。でも、ケイクんを一人で放っておくことの方が心配なだけ。彼って、いつどんなきっかけで崩れちゃうかわからないんだ。だから、誰かが居た方がいいの。”

でも、それがわたしじゃなくて千冬ちゃんってことが、納得出来ない。”

こういうときに、まずそれが出てくるのかあ。相当根に持ってるんだなあ。いろんな出来事があって、結構仲良くなったと思ってたんだけど、そこは譲れませんか感じなのかな。

”いまはまだ高校生だから、一応歯止めはかかっていると思うけど、大学生とかになったらもうわかんないでしょ。”

わかんないでしょって、、、え——、ま、まさか。

「わたしたち、兄妹なんだよ。」

社交的な外見だけど内面は古風で清純派の瑞江ちゃんから、まさかそんな発言がでるとは思ってなかった！

”兄妹関係っていうのは、わたしとお姉ちゃんみたいに、生まれてからずっとそういう環境で育って来て作られるものなの。ケイクんと千冬ちゃんのは、状況によってどう転ぶか分からない形式的な兄妹関係じゃない。そんなの、大した歯止めにはならないよ。特に千冬ちゃんが危ない。”

「ど、どういう意味よ、それ！どうして、わたしの！」

”だって、ケイクんは優しいから、わたしの事を思って自分からそういう事はしないもの。”

ひ、ひどい、、、と即座に反論出来ないのは、自分の中にやましが有るからだろうなあ。わたしって、最悪の場合、本当に殺しかねないもの。

「わかった。その条件飲むよ。」

”本当かなあ。なんか、あっさりしてて嘘くさい。”

「嘘じゃない。何かに誓って言うのなら誓ってもいい。」

”ふーん。まあ、これまでの付き合いから、そこはひとつ信用することにしておきましょう。

ひとつ屋根の下じゃなければね、いいんだ。マンションで隣とか。方法はいろいろあるんだよ。

でも、きたないなあーわたし。本当に汚いよ。

”何から話そうか？”

「ひょっとして、長くなる？」

”聞きたい？”

「、、、うん。」

あと1週間。

「ミズエ、分かってるよね。あと、1週間だよ。」

こわい。カンナの目がマジになってきた。言われなくても分かってるんだけど。

「だいじょうぶだって。もう、粗筋みたいなのは思いついてるんだよ。

ま、ちょっと本当のお話に纏めるのが難しい、っつーか。」

「なあ、カンナ。オレ、サッカー行っていいかあ？」

「う——。不本意だけどいいわ。ミズエ今日も駄目そうだし。」

今日が月曜日で、本番が来週の月曜日。他のグループは、机寄せて模造紙を広げたり、階段の踊り場で練習したり。順調そうでいいなあ。放課後が来るのが、こんなに嫌なのって生まれて初めてかも。

「ミズエ。今日は台本が出来るまで居残りね。」

「ええー、そんなあ。」

「そんなあ、じゃなくって、」

やめてー、腰に手をあてて見下ろすのやめてー。

「今日中に出来ないよ、いつまでたっても練習どころか、台詞も覚えられないじゃない！」

「はい。わかりましたあ、。。」

くっそー、あっちの2班の子。くすくす笑ってやがるー。いつもだったら、わたしの言う事に意見もいえないくせに。

ま、カンナだけだけどね、わたしを脅迫出来るのって。

「わたしも一緒に残ってあげるから、出来たところから見せて。」

ええ————！

あんたは、鬼教師か！

「いや、ほら。カンナは家の手伝いとかで忙しいって言ってたじゃん。だから先に帰っててくれていいよ。」

あ、なんか、ちっ、って顔した。

「家の手伝いとか、どうでもいいけど。」

「でも、わたしもひとに見られてると、緊張しちゃってアイデアが出ないっていうか。」

多分、全然何も思いついてないって言うの、バレてるんだろうなあ。

「じゃあ、今日は帰るけど。明日の朝にはちゃんと出せよ。駄目だったら、ウチの班解散だからね。」

「分かりました！ 明日の朝には絶対。」

絶対、間に合いっこ無い。ああ、先週のわたしのバカ。

「あんた、自分で手を挙げた班長なんだからね。」

そんな乱暴に鞆を肩に担がなくても。

「じゃあね！」

怖いよー。教師の方がまだまし。教室を出て行く迫力が、小学4年じゃないよー。

とりあえず、ノートを開いて。鉛筆もって。

うー、、、何も思いつかない。昨日までと全く同じ。なんでかなあ。
先週はあんなに自信あったのに。

白い。罫線の間が白い。この白さが、字で埋まって行く感じがしない、、、。
テストで、わけわかんない問題にぶつかって、一字も書けないみたいなの。

たかだか5分しかないんだよ。5分なんてあっという間なんだよ。
そうだ、短すぎるからかえって難しいんだよ。だから思いつかないんだきっと。

わたしってさあ、あんまし本読まないからなあ。マンガとかだったら、
結構読むし。だからストーリーとかは思いつくと思ったんだよ。

でも、それを字にするってことって、ちょっと違う事だったんだなあ。
まあ、思いつくのがマンガの恋愛ものパクったような話で、そんなの
学校の発表会で親の前で出来るわけないっていうのもあるけど。

”カンナが密かに思っているのがタケダで、バレンタインにチョコ
あげるかどうか悩んでいる時に、他のオンナがタケダに本チョコあげるって
言うのを噂に聞いて、、、”とか、カンナとタケダってみんなから
”夫婦”って言われてるのに、今さらそんな劇で盛り上げてもなあ。

パフェのクリームが植物性原料のクリームだったときぐらい、くどくて
がっくり来そう。

ああ、このままだったら明日もう学校に来れないよ。登校拒否だよー。
でも、そんなことしたら、お母さんに怒られるし。おねーちゃんには、
ほら言わんこっちゃ無いって目で見られるし。それだけは嫌ー！

なんとかしないとー、というか、なんとかならないかなあ、

奇跡でも起こって！

ん、あれ？

いまごろ教室に入って来るのって、、、ああ、転校生かあ。彼、また本持ってる、、、そっか、図書室に行ってたのか。へえー、本好きなんだ。

うわー、近づいて来た。わたしに何か用？、、、って、今んところわたしの席の二つ後ろ。窓際の一番後ろなんだよね。

なんて、名前だけ。後ろの席だから、余計目立たないんだよ。授業中も大人しいもんね。先生が当ててるのも見たことない。

前の学校と進度が違ったのかなあ。

ちなみに今抱えている本の題名は、何かなあ、、、。ネタになんないかなあ、、、。

”・・・子春”、、、こはるちゃんのお話？

なわけ無いでしょ、わたし。

読めないよー。何のネタにもならないよー。なんつー嫌みな本もって歩くかなあ、キミは。

それじゃあわたしの、何の役にも立たないじゃん。

でも、この時期、この時間に一人で図書室行ってるってことは、どこの班にも入ってないってこと？

本好きなのかあ、、、これは、ひょっとして、、、なんて、調子のいい事考えてるから、いつまでたっても台本が出来ないんだよ。

でもー、苦しい時は、わらしべ長者、ってやつ？

こんなに本読んでるんだったら、ひょっとして台本ぐらい書けちゃったりするんじゃないの。

「ねえ、ええっと。えー——、えー——、ええっと、、、」
女の子がこんだけ焦ってるんだから、気付けよおい。

「名前、なんだっけ。」

うわ、馬鹿かこいつは、みたいな顔。

「中森。」

「じゃなくて、下の名前。」

なーんてね、上手いなあ、わたし。

「景、だけど。」

「あー、ケイクンね。思い出した。ね、ケイクンて呼んでいいでしょ。」

「いいけど。」

といつつ、迷惑そうなのは何故。

ていうか、わたしにこーんなに親しくされて、嫌そうな顔するオトコ初めてみたよ。ム、カ、つ、く。

「ケイクンて、発表会出ないの？」

「えー、あー、うん。転校して来たときにはもう、班分けとか決まってたし。

その中で役割分担とかも、もう決まってるみたいだったから。」

そっか。割と中途半端な時に転校して来たものね。先生もうちょっと気を効かせろよなあ。

「それに、うちのひと、誰も見に来ないから。」

え。 そんなことって、あるんだ。

「お母さんは？」

「昼間はパートに出てるから。だいいち、発表会のこと言ってないし。」

そっか。案内のプリントとか、随分前に持って帰ってお母さんに渡したなあ。ふーん、誰も来ないのかあ。

「寂しく無いの。」

「いや、慣れてるし。」

慣れる、、、もんなの？こういうのって。わたしだったら、、、どうだろう。

「実はさ、ウチの班メンバーが足りなくって。」
というより、才能が足りてないんだけど。

「ケイクンどうかなあ、うちの班に入らない？ もう4年も学期末だし、
こういうイベントってもう無いと思うんだあ。」
なんか、周りが聞き耳立ててるような気がする。半分は気のせいだろうけど。
うしろ、行っちゃえ。

よいしょっと。
「これからまだ1週間。ずっと見てるだけって、つまんなくない？」
うわ、いま明らかに体引いた。どういふことよそれ。

「僕、別にいいよそれで。この学校もいつまで居るか分からないんだし。
無理に溶け込んでもあんまり意味ないし。」

は？

「もう転校するの。」
「そう決まった訳じゃないけど、1年とか1年半で学校変わってるから。
今度もそうなると思う。」
「何それ。」

わたしなんて、生まれてからずっとこの町で暮らして来て、幼稚園、小学校、
中学までどこに行くかぜーんぶ決まってるのに。

「それだったらなおさら、、、思い出つくろうよ。」
しまったー。わたしったら、なんてハズイことを。ケイクン、ぽかーんと
してるじゃない。

”思い出づくり”とかさあ、恋人が不治の病で余命3ヶ月っていう純愛ドラマ
じゃ無いんだから。

思い出じゃなくて、一生の汚点作っちゃったよー、今のハズイ台詞。
忘れてくれー、中森くん。お願いだから、聞かなかったことにしてください。

「丘野さんて、そういうこと言う人だったんだ。」

・・・死んだ。

でも、人生って、、、つくづく何が功をそうするか、わからないもんだ。

「で、出来てないのって、台本、というか話そのものが何にも無いってこと？」
そうだけど、ぶちぶち、、、。

「幾つかは考えたんだけど、正直、自分でも駄目だなあと思うのばかりで。」
もう、正直に言っちゃえ。あんな恥ずかしい台詞言っちゃった後だし、
もうカッコつけなくていいや。

「いまごろ才能無いのに気がついたんだけど、出来なかったら、
明日カンナに殺される。」

は一ってため息、、、つくよねー。
もし自分じゃなくて他人だったら、机蹴飛ばしてるわ、多分。
自分で責任とりなってる。

「カンナさんて、あの背の高い子だよな。」
「うん。」
「ほんとに殺されそうだなあ、、、。」

うわー、カンナのきついところ、一番知ってるのわたしだし。なんか、
お腹がキューッと痛くなって来た。

「大丈夫？」
もう駄目かも。

「ねえ、教えて欲しいんだけど。」
「はい。」
もう何でも聞いてください。

「どうして劇をやろうと思ったの。」
はあ？

「それ、台本書くのになんか関係ある？」
だって、全部の班が研究発表とかだと面白く無いじゃん。

「僕、台本とか書いた事無いし、書こうと思った事も無いんだけど。
もちろん、劇なんてやろうと思った事無いし。だから、丘野さんが
劇をやりたいって、しかもオリジナルの台本でやろうと思ったのって、
ちょっと凄いなって思うわけ。僕の頭の中に、なさ過ぎて。」

「研究発表とか、普通の授業でもやってるし。模造紙もって前に出て
、、、え、何？」

「そういうこと、もう少し小さな声で言った方がよくない？」

あ、しまった！ まだみんな、居残ってるんだった。でも、
「いいの。どうせまた、丘野が勝手なこと言ってるって思われるだけ
だから。」

「本当にそれが理由？」

しつこいなあ。声かけたの、失敗したかな。

「模造紙と台本とじゃ、てんびんが釣り合わなさすぎだよ。

もうちょっと、ちゃんと考えて。」

考えてるって。面倒くさいやつだなあ。

「発表会するってことになった時、カンナとタケダと、ミズシマで班つくって、研究発表だと他と同じになるから、何するか1日だけ考えようってことにして、家に帰ってからお姉ちゃんに6年は何やるのって聞いたら、演劇だって言うのを聞いて、、、あ、そっか。それでわたしも劇やろうと思ったんだ。」

「へえ、姉貴いるんだ、、、どんな人。」

何に興味あるんだ、こいつ。年上に興味あるのか？

でも、お姉ちゃんの事語るのは得意だぞ、わたし。

「美人で、頭よくて、すらっとしてて、クラス委員やってるんだよ。

おこるとちょっと怖いけど、でも普段は優しいんだ。近所の人だね、良く出来たお姉ちゃんが居るから丘野さんとは大丈夫だねえ、って言ってる。」

「ふーん。で、劇やるんだ。」

「うん。時間ずれてたらいいのになあ。でも、お姉ちゃんは今年が最後だからね。

母さんもお姉ちゃんの見に行けばいいよ。」

「こっちは今のところ、劇をやる目処立ってないし。」

くっそー。その通りだけど、むかつく。もうこれ以上話するの嫌になった。明日カンナに一発殴られた方が、よっぽどまだ。このヤロウー。

「丘野さんが主演やるんだよね。」

え。

「うん。」

「時間無いから、遠山さんと竹田くんを助演にして、水島くんはナレーションしてもらおうかなあ。背景とか作れないだろうから、ナレーションで状況説明するしかないよね。」

「書けるの？台本！」

その顔では不安になる一。

「あのさ。いままで作文ぐらいしか書いたこと無いから、台本とか
いってもそんなにちゃんとした物は出来ないと思う。それに明日の朝
までっていうのも、厳しすぎるんだけど。それでいいなら、やってみる。
もし、駄目だったら、僕も遠山さんに詫び入れるから。それでもいい？」

こいつ。やなやつだけど、神様に見えて来た。

ナレーション

”長い冬が終わり、湖に春がやってきました。岸辺の水草の茂みでは、いくつもの命が生まれ、育ち、やがて巣の外に出て仲間と遊び始めました。”

タケダ

”あー腹減った。あー眠い。”

カンナ

”ちょっと、あんた毎日そればかりじゃない。”

タケダ

”だってしょうがないだろう。毎日毎日足をバタバタさせて、泳いでばかりだ。オレも早く父さんみたいに空を飛びたいなあ。”

カンナ

”わたしは母さんみたいに、水面を滑るように奇麗に泳げるようになりたいわ。”

ナレーション

”二羽のアヒルの子供は、いつか自分たちが美しい親アヒルになることを夢見て羽ばたいたり、潜ったりしているところに、もう一羽のアヒルがやってきました。”

「ねえ、これさあ、劇で出来るの？」

「いや、普通の劇は無理。遠山さんはともかく、竹田君にこの演技やれって、僕、間違っても言えない。」

「じゃあ、台本できても、意味なくね？」

「うん。だから、ペーパーシアターにしたらどうかと思ってる。

児童館とかで、みたこと無いかな。」

「ふうん。」

なに、カンナ、その目。

「つまり、こういうこと？ どこかで劇じゃなくて、この”みにくいアヒル”をやるのがメインになったってわけ。」

「うん。昨日の日付が変わるころ。」

えー、そんな時間までやってたの！

「どうして”みにくいアヒルの子”。」

「うーん、とりあえず最後まで読んでみってくれる？それで分からなかったら、この台本、失敗だったってことになる。」

「なるほどね。結構、いさぎいいんだ。」

ケイクンに書いてもらった台本なのに、わたしが書いたわけじゃないのにものすごくドキドキして来た。

にしてもカンナ、全然追求して来なかったなあ。昨日の時点で、もうわたしじゃ絶対無理だと思ってたんだろなあ。

悔しいけど、その通りです。

丘野

”ねえねえ、わたしも仲間に入れて欲しいなあ。”

タケダ

”なんだお前。汚い灰色の羽根をしゃがって。気味が悪い。”

丘野

”羽根は灰色でも、ちゃんと羽ばたきができるよ。”

カンナ

”なんだお前。灰色のくちばしをしゃがって。お前にわけてやる餌はないよ。あっちへ行け。”

丘野

”くちばしは灰色でも少ししか食べないよ。一緒に餌を食べようよ。”

ナレーション

”みにくいアヒルの子は、来る日も来る日も仲間に入ろうとやってきました。でも他のアヒルは仲間に入れてくれません。仲間に入れ無いどころか、くちばしでこづいて追い出そうとします。”

タケダ

”うっとおしいやつ。この湖から出て行け。”

ナレーション

”みにくいアヒルの子は、いつも仲間と離れて一人ぼっちでした。寂しさを紛らわそうと、小さな声で歌を歌っていました。”

丘野

”わたしはいつも見上げてる♪
青く大きく高い空♪
わたしはいつも夢見てる♪
翼広げ飛び立つ日♪”
いまがどんなにつらくて、明日がみえなくても♪
水面を蹴り羽ばたく、時がきっとくることを♪”

ナレーション

”けれどもその歌声は、誰の耳にも届きませんでした。
そうして春が終わり夏が近づきました。アヒル達はどんどん成長し、
親達と見分けるのが難しいぐらい大きくなりました。”

タケダ

”オレはもうすぐ空を飛べるぞ。”

カンナ

”わたしは潜って、水草をとれるようになったわ。”

ナレーション

”ある日、突然黒雲が広がると、激しい雨が降り始めました。アヒル達が見た事も無いような光が地表に落ち、大きな木がまっぴたつに裂けました。湖は荒れ、大きな波と凄まじい風が岸辺のアヒル達のすみかを襲いました。”

タケダ

”わあ、助けてくれー。”

カンナ

”お父さんどこー、お母さんどこー。”

ナレーション

”嵐の夜が明けて、湖に日が差し込みます。

でも、アヒル達のすみかは風に荒らされ、波にさらわれて、見るも無惨なありさまです。

アヒルたちは散り散りになり、家族や友達と離ればなれになってしまいました。このままだと、まだ飛べない若い鳥達は、狐や鷹に襲われてしまうかもしれません。”

タケダ

”だれかいないのー。”

ナレーション

”こたえは有りません。”

カンナ

”お父さんどこー、お母さんどこー。”

ナレーション

”さがしてもさがしても見つかりません。

そのとき、湖面をわたる風に乗って美しい歌声が聞こえてきました”

タケダ

”なんて綺麗な声なんだ。声のする方に行ってみよう。”

カンナ

”なんてやさしい声なんだ。誰か居るかもしれないわ。”

ナレーション

”歌声にひかれて、たくさんのアヒル達が集ってきました。

離れ離れになっていた親子や兄弟が、家族と巡りあうことができました。”

タケダ

”歌っていたのは誰だろう。”

カンナ

”歌のお陰で、またみんなと巡り会えた。”

ナレーション

”なぎ倒された水草の陰で、歌い疲れて眠る灰色のアヒルがいました。

その日から、灰色のアヒルが一羽でいることは、無くなりました。”

「で、結局そのペーパーシアター、やったの？」

”うん、準備が大変になっちゃったけど、当日は台本見ながらでもやれたから、かえってよかったと思う。”

「どうだった？」

”わたし、話の流れから言って、ケイくんがわたしのことを題材にして作ったんだあって、思った。わたしのお姉ちゃんへのコンプレックス。そんなこと、どうでもいいんだよ、って言ってくれてるって。”

「そっか。そうとも、とれるね。」

”そうなんだよ、多分見た人はいろんなふうに受け取ったと思う。でも小4の女の子には、それがいっぱいいっぱいの理解だったんだよ。ああ、わたしの話、そんなふうに受け止めてくれたんだって。”

「それで好きになったの？」

”ううん。違う。そのときは、なんとか劇が終わってほっとたのと、まあ、ちょっと嬉しかった、ってぐらいのもの。あるがままのわたしでいいんだって、肯定してくれた事が。本当に好きになったのは、もうちょっと後だった。”

「聞いてあげようか？」

”いいよ、もう。”

「うそ。ちゃんと聞くから。」

”カンナがね、タケダがパス出した、っていいに来たの。”

「ごめん、分かんない。わたし、サッカーとか知らないし。」

”はは。男子はね、休み時間にミニサッカーやるんだよ。他のクラスと試合するんだ。タケダってエースストライカーだから、自分でドリブルして、

相手を抜いて、ゴールまで持って行っちゃうってサッカーばっかやってたの。
それが、あれ以来、パスを出すようになったって。”

「うーん、やっぱ分かんない。」

「おつかれー、今日は苦戦してたじゃん。」

「そっかー？」

午後の予鈴がなって、教室に戻って来たタケダにカンナが突っ込んだ。今日はいつものように点が入らなかったし、タケダがボールをもつ時間が少なく思えた。

それは、カンナがいつも見ていたタケダのサッカーとは違うようにも、なんとなくの違和感を感じていた。

「あっつー。」

冬なのに汗いっぱいいかいちゃって。それをまた、Tシャツの袖で拭いちゃうんだよねー。

「今日はイマイチだったけど、次はもっと上手くなるよ。」

「へー、なにになに。タケダがなんか考えてるのー。」

タケダが何いってんだこのヤロウ、みたいな目でカンナを見返した。

「オレさ、いままで全然フィールドを見てなかった。ゴールばかり見て、敵をかわす事しか考えてなかった。」

「それがタケダのサッカーじゃん。ボール持ったら、とにかくゴールに向かって突進して行くの。」

「学校の休み時間に遊びでやるサッカーでさ、オレだけ楽しんでるっていうの、なんかバカ見たくね？」

「サッカーばかなんだからそれでいいじゃない。」

「よくねーの。オレはサッカー好きだけど、オレの好きなサッカーを他のやつも好きになって欲しいわけ。そうやってサッカー盛り上げたいわけ。」

わー、ようやくそれに気付いたか、このサッカーばか。でもどうしてだろ。急に人が変わっちゃうって。

あ、先生来ちゃった。

「キリーツ、レイ。」

5時間目の授業の間、いつも授業を聴いていないっぽいタケダが、今日は一層聞いてないというか、なんか他のこと考えてるっぽい。ずっと起きてるし。

早く授業終わらないかなあ。わたしは一応授業は聴いてるんだけどね。今日はタケダのことの方が気になるんだ。せんせ、ゴメン。

”キーンコーン”

終わったー。

「タケダ、帰ろ。」

「オウ。」

今日の放課後は、5年生が運動場を使う日。だから4年の私たちは、早々に下校しちゃうってわけ。

タケダはこの地区のサッカーチームに入っているんだけど、練習はコーチの都合で土日だけだから、公園でジシュレンやったりとか、たまに集ってゲームをやったりもしてる。

わたしは幼稚園のころから、友達よりも背が高かった。ことあるごとにそれを言われて、、別に嫌みを言っているつもりは無いんだろうけど、人と違うところを指摘されるのって、ちょっと辛かった。

だから、女の子より男の子と遊ぶことが多くなった。

たまにケンカしたときに、“デカオンナ”とか言われたりするけど、ケンカの売り言葉だと思えば気にならなかった。わたしも”チビオトコ”って言い返したし。

そうやって、言い返せるのが良かったんだと思う。女の子にそんなことしたら、二度と口聞いてくれないだろうから。

タケダは小さい頃からボールの扱いが抜群に上手くて、それを見るのが好き。

このあたりだったら、5年生よりも上手いと思う。プロになったらいいのに、って思うし応援もしてる。

試合の時に、“タケダ行けー！”って応援して、ゴールが決まったらものすごく嬉しい。

最近、どんどん背が伸びて来てるよね。

わたしの方がちょっとだけ高かったのに、もうすぐ追い越されるんじゃないかな。この先、中学とかいったらもっともっと大きくなるんだろうな。

背中見てると、そんなこと思うよ。

「ね、昼休みの続きなんだけど。」

「ん？」

「なんで、急にスタイル変えようと思ったわけ？」

「ああ、あれか。別に今日急になってわけじゃないんだぞ。しばらくちょっと考えてたんだ。」

「しばらくって、どれぐらい？」

「うーん、一週間ぐらいかなあ。」

「ふーん。で、なんで？」

なんか、ちょっと口とんがってない？ そんなに言うのいやなことなの？
却ってきになるじゃん。

「”みにくいアヒルの子”やったじゃん。」

あつ、、、、。

「あの時のオレの役って、飛びたい飛びたいってそればっか考えてる
アヒルで、自分と違うアヒルを無視するっていうか、、、、ディスって
ただろ。それ、サッカーの時のオレなんだよ。

自分が一番上手くって、点が取れる。だから下手っピーにはパス
出さないで、ドリブルで突破してゴールして、勝ったぞヤッターって。

でも昼休みにサッカー付き合わされて、1回もボールに触らないまま
終わるやつもいるわけで、それって、嫌けどしょうがないからやって
るんだらうなって思った。」

そればっかりじゃないんだらうけどね。でも、そう言うヤツも多いんだらうな。

「それで、今日はボール奪いに行って、パス一杯出してたのか。」

「今日は上手く行かなかったけどな。みんな突然パスが飛んで来て、
ビックリしてたし。そんなサッカー今までやってないから、そのあと
むちゃくちゃだったし。

でも、終わったあとみんな言ってたんだよ、、、、今日は楽しかったって。
オレそれ聞いて、めっちゃ落ち込んだけど。」

それで口尖らしてたのかなあ。

「あいつ、ちょっとやなやつだな。」

「あいつって、中森？」

うなづいた。

「転校して来てまだそんなにたっていないのに、オレの事見透かしてるって、やじゃね？」

さあね。あんたのことは知らない。

「あたしさあ。別の事思ったよ。翼が灰色でも別にいいじゃないって。

みんなと違うのって、マイナスじゃないんだって思った。」

「いーみわかんね。」

「あたし、ずっと女の子の中で背が高いの嫌だったんだけど。」

「え、マジ。オレ、ヘディングで競ったら超有利そうで羨ましいって、思ってたぞ。」

こいつ、やっぱバカだー。サッカーが全部の基準かよ。

「でも、なんか吹っ切れそうな気がする。背が高いって言う子も、

たいした意味も無く言ってんだろうね。あたしが勝手に気にしてただけかもしれないし、やっぱり嫌み言われてたのかもしれない。

でも、気にすんなって灰色のアヒルが言ってた。」

どしたの、急に立ち止まったりして。

「なんか、忘れ物？」

なんてこと、ないんだろうけどね。

「あいつは凄いやつだ。あいつは別格だとかって言われ続けるのも、正直、結構うざい。」

「どうしてー。カッコいいじゃん。」

「蒲生で1番になっても、そんなやつ日本に千人ぐらいいるんだよ。

全然別格とかじゃないし。学校でいいかっこして、それで気分よく

なってるだけでいいのなら、それでもいいけど。もっと上を目指すんだったら、何かちゃんと考えてサッカーしないとなあ、とは思ってた。

けどそのきっかけが”みにくいアヒルの子”です、とあって、将来的にあり得ねー。」

「それが、さっきの話とどうつながるの。」

”千冬ちゃん、ひょっとして怒ってる。”

「怒ってないけど。」

じつは怒ってるかも。

「話が長いわりには、全然つながって来ないんだもの。わたし、

いったい何を聞こうとしてたんだっけ。」

”ガールズトークが長いのは当たり前でしょ。話が横道にそれるのも。”

「じゃあ、まだ続き有るんだね。」

”もう殆ど終わりに近い。”

「よし！」

”あー、傷ついたなあ、いまのよし！”

「だって、わたし、人に翻弄されるのって嫌いなんだもの。」

”わかったわかった。本当にあともうちょっとだから、腹くくってちょうだい。

まあ、あともうちょっとが結構長かったっていうのはよくあることだけどね。”

もう、いいや。

”、、、っていう話をカンナから聞いて。しばらくしてからかな。

例の非常階段の話につながるの。”

「“みんなが楽しそうに遊んでるのをみていると、幸せな気持ちになる”って

いったってこと？」

”そう。流石だねー、よく覚えてる。あの時が始まりだったんだー。”

「めでたし、めでたし。」

”じゃないでしょう。今日の本題って。”

「わあー、そうだった。」

まだつづくの、このトーク。

頼んだのはわたしだけど、大変申し訳ないけど、いい加減疲れて来た。

“でもね、そのあとすぐ大変残念な事が起こったのよ。4年から5年になるときにクラス替えがあって、1組にカンナ、わたしが2組、ケイクんとタケダが3組に分かれちゃったの。”

「クラス替えぐらいあるでしょ。」

わたしなんか、何回転校した事か。

“だって、好きな男の子ができたのに、その直ぐ後にクラス替えなんて何かの陰謀以外の何ものでもないわ。”

そんなわけないでしょ。

“同じクラスだったら、へんな虫がつかないように目を光らせるとか、予防線をはるとか、威圧するとかいろいろできるけど、教室が違ったらそんなの不可能でしょう。事実、6年のときに変な虫ついちゃったわけだし。”

・・・遂に虫扱い。

“しょうがないから、タケダにケイクんの様子を聞いてたんだけど、、、あるとき気付いたの。ケイクンて自分から友達を作りに行かないってこと。”
「そうなの？ え、だって。今も彼って結構友達いると思うんだけど。」

“友達が居ないとは言っていない。自分からは作りに行かないってこと。サッカーはやってたけど、あれはわたしがタケダに誘えっていったからだし、中学のときもそうだった。誘われれば断ることはないんだけど、自分から声をかけるところなんて、見た事がない。”

「部活は？」

“ウチの中学、一旦は全員どっかに所属しないとイケない規則だったの。ケイクンは美術の才能ゼロだし、音楽もにたようなもの。運動部系で、個人で出来る競技で、って言う条件を陸上部は見事にクリアしていたわけよ。まして長距離なんて、他にやる人いないっしょ。”

「最悪。」

”そう、今から思えばね。でも中1のわたしじゃあ分からなかった。

ただ彼の事が気になって、わたしの気持ちに答えて欲しくて、どうしたら振り向かせられるか、どうしたらこの先もずっと一緒にいられるのか。どうすればわたしの事を好きになってくれるのか。

そんなことばかり考えて、悩んで、苦しんで。”

わたしが北海道で彼から引き離された事を苦しんでいた時、この子も別の意味でもがいて、苦しんでいたんだ。

”付き合っ、分かれて、付き合っ、分かれて。わたしのいない寂しさを味わせようとしたけど、寂しくて辛くなったのはわたしの方。

付き合っっても、彼がどこかに心の一部を置いてきてしまってるような不安をいつも感じてた。優しく暖かくて、わたしの無理を聞いてくれる。でも、何か足りない。

それをわたしは、千冬ちゃんが彼の心を北海道に持って行ってしまったからだと思ってた。”

思ってた。 過去形？

”去年の夏の事が終わって、暫くして、あるとき、ふっと。冬になる前の朝だったかなあ。

学校へ行く道すがら、雲一つなくて、何にもないのに、空の青が深いなあって思って見上げてたとき、、、前触れも無く分かったの。

千冬ちゃんの話は当たっているけど、わたしの不安の原因じゃなかったって。”

いやだ、なにかドキドキしてきた。このドキドキの仕方、すごく嫌な感じがする。この先を聞きたくない、って胸が言ってる。

”彼はね、誰かから必要とされたいの。だからその人の前では、その人が望んでいるケイクンっていう男の子を演じているの。

わたしや、千冬ちゃんや、お姉ちゃんや陸上のあの子。ラ・メールの蓮さん。その他は知らないけど、あなたのクラスメートの誰か、とかもいるかも。彼って、女子の間で人気があるってタイプじゃないのに、彼と関わった人って、どういうわけか彼の事を普通以上に好きになるでしょ。

それはね、彼がそれぞれの願望に合わせたケイクンを演じて分けている

からなのよ。

だから必要とされれば必要とされるほど、彼の心はそちらに傾いて行く。

どうしてかっていうと、それが父親と母親に必要とされなかった彼の、心の空白を埋めてくれる唯一の救いだから。”

あの時、彼がわたしといく事を選んだのは、わたしが全てをさらけ出して彼を欲したから。そういうのね。

”今日、ケイクンがあなたを置いて帰ったのって、多分千冬ちゃんが彼無しでも生き生きとやって行けてたからじゃないかな。自分の出る幕じゃない、今は必要とされてないってね。

だからその場に行ったとしても、自分をどう演じればいいのか分からなくて不安に思ったんだ。”

「そんな、、、馬鹿げてるよ。」

”そうだよ。彼ってバカなの。必要とされてないと思うと、受け入れてもらえない、どう振る舞えばいいか分からなくなるバカなの。

無理難題を押しつけられると、大変だとかいいながら全力で頑張っちゃうバカなの。それが分かって、わたしの中のもやもやの全ての辻褄が合っちゃった。

ケイクンがわたしにすることは、元をたどれば全てわたしの願望に行き着いた。彼自身の願望がどこにも居ない。わたしの不安はそれだった。

彼はわたしに合わせていてくれるだけで、わたしを好きでもなんでもないんじゃないかっていう不安。

でも彼の欲望はちゃんとあったの。誰かに、いつも必要とされていたい、っていう願望。

そして、その誰かっていうのは、多分誰でもいい誰か、ではないんだよ。”

これが、3年間の空白の差、なのか。それとも、彼女だけが景の本質を理解出来る人だったのか。彼女だけが、、、。

”東京行きの話。わたしケイクンと一緒に行ってくださいって頼んだわけじゃないの。”

「え、違うの？」

”あなたの人生をわたしに下さい、ってお願いしたんだ。将来が約束されたわけでもない女の子が、他人の人生下さいって、一体何様のつもりよ。

わたし、別に音楽で身を立てたいなんて思ってない。

歌は好き、人前で歌うのも好き。ちょっとは才能有るのかもしれない。でも、本音はそんなことどうだっていいの。

わたしは、バカやろうに、あんたの人生くれっていうとんでもない
大バカものを演じたって分け。”

「もし、景に拒否されたらどうしたの。」

”うーん、考えてなかったなあ。でも、もしそうなったら、少し醒めたかもしれない。醒めるっていうのは恋愛感情とかの問題じゃなくて、現実的な選択をしたらどうってことだけど。

上の大学に上がって、彼とは遠距離になっちゃうかもしれない、それなりの年齢になったら誰かと結婚して。そういう普通の人生を選ぶんだらうな。”

彼女のいう事は、正解なんだろう。

ちょっと、ショックが大きすぎて立て直せない。わたしが気付かなかった事を彼女が知っているというのは、そうかも知れないと思ってケイタイをしたのだから、それはいい。

でも、彼の、こんなにも深層にまで降りて行くような事だとは思っていなかった。

”ショック？”

「うん。」

”だよ。わたしも自分で気付いたとき、ちょっと愕然としたもの。5年間見て来たケイクンて一体なんだったの。ホンモノ、それともフェイク？わたし騙されてたの？って。”

「うん。」

”それはまだ分からないんだ一、、、。でも、もうどうでもいい。あれをいうとき、さすがに究極の勇気使ったけど、彼がオーケーしてくれたときから、わたし恋愛から恋を抜いちゃうことにしたから。

彼が、求められる事で救われるんだったら、わたしこれからずっと、彼に無理難題をお願いしちゃうの。

そうしながら、彼の薄皮を一枚一枚めくって行って、最後までめくった時に、何も無くてもいい。そうやっておばあちゃんになった時、なんて素敵な人生だったんだらうっていえる自信、あるもの。”

この子、変わらないなあ。一途で、混じりっけなくて、自分の一番と

彼の一番がちゃんと交叉している。

”あーすっきりした。去年の夏以来、ずっとうつうつしてたのが、すっきりしちゃったよ。今回はわたしの勝ちだよ、千冬ちゃん。”

これから先、暫くの間。いや、今漠然と思っているよりもずっと長い間になるかもしれない。

”今回はわたしの勝ちだよ、千冬ちゃん。”

この言葉を、何度も思い出さるうなあ。

今日、瑞江にケイタイしなければ良かった。よくよく考えもせずに、誰かに聞いて解決しようなんて安易なことを考えた罰だわ、これは。

彼女は考えて、悩んで、苦しんでこの答えを導きだしたのだから、わたしに勝ちを宣言する資格は十分にあると思う。

わたしがこだわっているのは、ちっぽけなプライドが傷ついて、自己中な嫉妬心が樹を覆い尽くす蔦のように絡み付いて来るから。たかだか17歳の普通の高校生を、とびっきりの女の子2人が綱引きをしているなんて、周りから見れば、ちょっと理解に苦しむかもしれない。

でも、瑞江にもわたしにも、彼とのストーリーがあって。そう簡単には断ち切れない思い出ができてしまっている。単に、好きとかどうとかの問題じゃないんだ。

そしてわたしは、彼女が掴んでいることを、多分本当には理解出来ていない。所詮、言葉というのは便宜上のものでしかない。そんなもので伝えられる事って、真実という名の香水の、蓋から漏れた匂いぐらいの物でしかない。

今度の日曜日、練習休みって言ってたな。ちょっと、ゆっくり話した方がいいのかも。最近、お互いの部活とかに時間取られて、、、わたしは、寺島のメールに目を通さないといけなかったりもするし、、、同じ家の中で疎遠になってたかもしれない。

お昼、おそうめんとか食べるかな。
伊佐さんに聞いて、麺つゆでも作ってみようか、、、。

なんだか、今夜は眠れなくなりそう。頭も体も重くて、さっきからベッドに

めり込むぐらいなのに。

なんていうのか、一度卒業しそびれて、そのままずるずる来ちゃってるわけだけど。この通りをもう何回往復したんだろう。

この葉っぱの広い並木とか、、ケヤキ？ ポプラ？ まだまだ夏の日射しを遮ってくれるのはありがたいけど、それってなんとなく、老いを感じる。

1年のときは木陰なんて気にもしなかった。

時間割を気にしないでいい。朝から夕方までを、狭っ苦しい机と椅子に縛り付けられる事がない。そんな自由にうきうきしていた時代だ。

上級生が、大人に見えたなあ。

そんなこんなでぐずぐずしている間に、同期は留年組以外みんな巣立って行っちゃうし、部活やってないからその系列の後輩もいない。ちょっとした異邦人感覚っていうのを味わえるってわけだ。あんまりいい意味じゃなくてね。

世間の荒波に比べると、まだ居心地がましっていうのに、のほほんとしてた報いだね、これは。こんなことしてるから、学校から広報のインタビュー受けるなんて言ってくるんだよ。

何言ってやがる、っていうの。

わたしは筋金入りの、その手のニコニコ対応大嫌い娘なんだ！ 研究室間借りしてる手前、やりますけどねー。

別に賞とったわけでもないのに、ちょこっと絵が売れて美術系雑誌に写真が載ったってぐらいなのに、なーに盛り上がってるんだろ。

でも、多少、満更でもないわけなんだが。これが。

うーん。こう言う貼り紙、、、。

どうして美大にテニス部とかバスケット部があるわけ？

美大生なんて、運動音痴で放課後は白衣着て絵筆握るしか能がないっていうのが、相場じゃないの。美大生は運動神経鍛えちゃ駄目。

不健康で、顔色悪いわりには服の色が原色、っていうのが王道なんじゃない。間違ってるよこんな部員募集の貼り紙。

そんなこと言ったら、運動場が有る事すら否定しないといけなくなるけど

な、、、一度も足を踏み入れた事ないな、あそこ、、、熱そう。
、、、猫がひからびてそう。

どうしてあたしの研究室は2階なの！

階段登りますけどね。エスカレーターついてる大学もあるらしいけど、それは大学のあり方としてどうかと思うけどね。少しばかりの努力ってものを放棄するのは良く無い。

たまにはいいこと言うねえ、あたし、、、うわ、きつー、暑いー。
もうちょっと、、、先生いるよな、、、夏休み終わってるんだし。

これで居なかったら、ケイタイで呼び出してやる、、、
確認してから来れば良かった。

ついたー、、、。

「せんせー。いるー？」

どこだー。どこにいやがるー。出てこいー。

「あー、蓮せんぱい。」

げ。

「美月かー。何してんの。」

また、話がややこしくなりそうなのが、よりによって。

「製作ですよー。もうすぐ桜美祭なんで。気合い入れて1枚仕上げて、

蓮せんぱいみたいにデビューしちゃおっかなあ、なんて。」

あほか。

「思ってたけど、せんぱいの製作中の見てやめました。今、何枚ぐらい描いてるんですか。」

「20枚ぐらいかな。」

「よくそんなに描けますね。わたし、絶対ムリ。学祭の1枚だって、結構必死なんですけどね。」

わたしも学生のときはそんな感じだったけど、ちょっと自信ついてから、イメージを引っ張りだすのが楽になったな。

あと、いつでも描けるっていうのと、いま描かないといけない、っていう自分が置かれた状況の違いもあるか。

「大沢。ちょっとは後輩達の面倒もみてやってくれ。」

なんだ、アトリエの方にいたんじゃない。ずっと出てこいよなあ。

「あたし、こういうの相手にしても、何指導してやればいいのか分かんない。」

「こういうのって、わたしの事ですかあ。」

そうだよ。何描きたいのかははっきりと分かってないやつの指導なんて、出来るもんかい。あと、やたら語尾のばすやつ。

「おまえ、居候の身分なんだから。ちょっとは大家の顔を立てるとかさ、なんかないのか。」

「その、大家さんに相談が合るんだけど。ウチの学校。アメリカに提携校とかない？」

を、何そのビックリって顔。カエルが土の中から出て来たら、目の前に蛇がいたみたいなの。

こんな門馬のビックリ顔って初めてかも。

「お前、なんかあったのか。」

「なんかって何よ。」

「いやあ、、、失恋したとか。」

「えー、せんばい失恋したんですかー！」

だからこいつ見たときヤバイ感じがしたんだ。話がどんどんそれて行くだろうが。っていうか、わざとややこしくしてるだろう、美月。

「アメリカなんか行かなくても、わたしが慰めてあげますよう。」

「おまえ、酒飲んだら自分すら忘れるじゃないか。それに、失恋なんてしてないっつーの。これだからオヤジは。」

ほんと、勘弁して欲しいわ。普通、常識的に、アメリカで学校探すっていったら、絵の勉強しに行きますってことだろ。失恋したからアメリカに飛び出すなんて事、ありえないじゃない。そんなパンフレット旅行会社のどこにも置いてないって。

「2、3年向こうで勉強しようと思うんだけど。どういうところに行けばいいのか分かんなくて。ウチの学校で、そういう関係のところ紹介してもらえないかなあ、と思ったわけ。」

いや、先生。どうしてそんな困惑した顔で椅子に座るかな。世間では、若いうちに旅をさせろって言うじゃない。もうちょっと、その、”大沢よく言った、頑張れ、応援してるぞ”みたいな顔って出来ないものかねえ。

「一体、何きっかけよ。」

「ちょっとね、留学しないかって誘ってくれた人がいて。費用とか学校の紹介とか面倒見るからって。でも、そっちはちょっと事情があって断ることにしてるんだけど、あっちには行ってみるつもりなんだ。」

「うーん。ウチの学校にも協定校があるにはあるんだが、、、だいたいお前、向こうに行って何勉強しようと思ってる？ ちゃんと考えてんだらうなあ。」

うーわ、失礼なやつ。指導教官だけに余計ムカつく。

「そんなの考えてるわけないじゃん。」

「ほらみろ。そんな考え無しで外国に行っても、遊覧観光コース回ってるうちに里心が出て、帰ってくるのが落ちだぞ。」

「いいんだよ、そんなでも。自分の前にある壁が、なんなんだか分かんないんだから、何勉強したらいいか分からなくて当たり前。とりあえず行ってみて、いろんな物に触れて、感じて、どうするか決めるの。」

うちは親の代からそういう流儀でやってんだから、それでいいの。」

ふんだ、まいったか。

「なら、留学先紹介する必要ないだろ。」

しまった、ちょっと調子に乗りすぎたかな。

でも、わたしもさあ、さすがに勢いつけないと話せないような事柄なんだわ、今回ばかりは。

「だから一、さすがに何にもなして言うのは心細いっつーか。客観的に見て”バカ”じゃない。それって。」

あ、大げさにため息ついた。

「いつ行くってのも決めてないんだな。」

「うん。もう流れで、としか考えていない。何かが決まれば、それ基準でどんどん決まって行くもんじゃない、こういうのって。」

人はそれを、行き当たりばったりと呼ぶ。

「お前、大丈夫か。国内じゃなくて外国なんだぞ。」

「いまのわたしに必要なのは、慎重さじゃなくて大胆さ。ちょろっと売れて、そこそこの人生を楽しみたいなんて思ってないの。なんていうのかな、、、もっと自分を拡張して、飛べる物ならもっと遠くに飛んでみたいんだ。」

そうやって、因習としきたりに捕われた、あの家を開放してやるんだ。なんてね。そういうのはちょっと、余計なことかな。

「普通、指導者としては、そういう野心をもっと喜んでやるべきなんだろうが。お前は見た目と内面が正反対だからなあ、、、でも、飛行機に乗りさえすれば十数時間か。」

なんだか一人前の人間として、全く認められていない気がして来た。わたしが4年間で築いてきたものって、そんなもの？

「蓮センパイ。麦茶飲みます？」

そしてもう一人、なにか斜めの方角からわたしに感心を示すやつ。

「留学制度もあるにはあるんだが、その説明会やら募集やはもうとっくに終わってるんだ。とはいっても、向こうでとった単位を認定するかどうかとか、留学費用のこととか、卒業しちゃってるお前には、関係ないことだな。

なんていう大学があって、そこがどういう特色があって、とかいう話は国際交流課に行けば教えてくれるだろう。どこまで面倒見てもらえるのかとかも、そこに行けばわかるさ。」

留学制度の話とか、いままでひとつ言も言わなかったよな、このオヤジ。世間一般では、そういうのを調べた上で入試受けるんだらうけど、きっと。

、、、アメリカに麦茶あるかなあ、うまいなあ、麦茶。

「せんぱい、アメリカ行くんだったらニューヨークですよー。わたし遊びに行きますから、泊めてくださいねー。」

その黄色のストッキングで、飛行機乗ってみろ、っつーの。ま、関係なさそうだけど、、、。

は、は一ん。つまりはこういうことか。

もしあたしが教官で、美月が留学するんですけどー、とか言い出したら、頭はり倒して、止めとけて言うだらうな。

いまの門馬の心境って、そういうことなんだろう。

「先生、あたしさあ。このまま今の鉱脈を掘り進めたとしても、もう行き止まりが見えて来ちゃってるのさ。これからもプロとして続けて行く為には、もっと新しい石を見つけないと、どうしようもないんだよ。

描く意欲は合っても、描く物がわいて来ないなんて言う事に、なりたく無いんだ。」

「それは分かっちゃいるんだがなあ。親とは相談したのか。この無軌道嬢ちゃんは。」

「笑っちゃうぐらい、あっさり賛成してくれた。」

椅子からズルって、コントじゃないんだから。

「そうか。それじゃあ、、、仕方ないな。」

出発する時までには、その苦笑いじゃなくて、ちゃんと笑って送り出してもらえるように準備するよ。あんたには好き勝手言ってばっかで、わがまま聞いてもらって、ほんと感謝してるから。

高校時代の我流の箸にも棒にもかからないような絵が、画廊の壁に吊されるようになったのって、このアトリエで描いた日々の積み重ねだもの。もちろん、わたしの才能が一番だけだな。ワッハッハ、、、恥ずかし。

「画廊には言ったのか？」
大人の心配だねえ。

「まだ。さすがにビジネスの世界が絡んで来ると、”無鉄砲娘の思いつき”を持ち込むのはどうかと思って。しばらく絵が出てこないってことだし、その先のこととか、いろいろあるでしょ。

だから単なる絵空事じゃなくて、一通り人には話して、ある程度目鼻がついてからにしよう。」

内田さんが、たんなるお金儲けの為に、わたしに関わってくれてるんじゃないっていうの、分かってるから。わたしのためにお客を集めて、筆の遅いわたしのためにお客をなだめて、個展を企画して尻をたたいたり、メディアに宣伝してくれたり。

「向こうでもちゃんと絵を描いて、あたしがどんなふうにな変わって行くかを見ていてもらわないとね。」

門馬は、頭の後ろで両手を組んで、椅子の背もたれを軋ませた。軋ませて、目を閉じて二度ほど頭を後ろに倒した。

「そうかあ、ようやく此処を出て行く気になったか。」

「お世話になりました。」

門馬は、そのまま天井を見上げて話し始めた。

「全くなあ。手間のかかる生徒だった、、、いや違うな、手間はかからなかったな。描きたい物を、描きたいように描いていたからなあ。ほっといたら、いつまでも描いてるし。ほったらかしでも、何か描いてる。だから、手間はかからなかったんだ。

でも、描いても描いても、なんだか不満そうにしているお前を、どう導いてやればいいのか、それがよく分からなかった。場所を提供してやる事ぐらいしか出来なかった。それが、歯がゆかったなあ。」

「そんなだっけ。」

蓮は麦茶の入ったカップをゆらゆらさせながら、とぼけた。

「何きっかけだったっけ、、、そうだ、あのセーラー服の女の子。人物画、初めてだったよなあ。」

「そうかも。」

くっくっく、と笑いながら首の角度を元に戻した。

「お前、人物画嫌いだったのにな。」

「お、ぼ、え、て、な、い。」

何故か棒読みで答える蓮。

「飲んだとき、、、2年のときだったか。人物なんて、あんなもの恥ずかしくて出品出来ない、なんて言ってたのにな。

まあ、人間の言う事なんて、その場その場で結構変わるものだし、その有効期限なんて、翌朝酒が抜けるまでの間だって事ぐらいは分かっているんだが、古今東西、3千年も前から人物像っていうのは、もっとも良く描かれて来たものなのに、今更あえてそれを口に出して否定する歪みっぷりが面白かったんだよな。」

「なに、勝手に総括してるのよ。あたしが有名になったときの、”恩師へのインタビュー”のリハーサルのつもり？ たしかにあたしは歪んでたけど、美大生なんて大概どっか頭のねじが曲がってるもんじゃん。」

「わたしはまともです。」

美月がいうのももっともだ。なんでもかんでも、自分と同じ、一緒くたにするのは間違っている。とはいえ、まともの基準で一体なんだ。

「みーづーきー。あんたねー。」

ああ、でもこの子は。両親が居て、兄弟がいて、普通のサラリーマン家庭だって言ってたな。習い事で始めたアートスクール通いが、そのままなんとなくの進路になったって。こんな子にとっては、どこかの会社に就職して、結婚して言う方が、絵で一生のたうちまわりながら食べて行くというより、普通の人生なんだろう。彼女が”まとも”って言うのは、そういう意味なんだ。

美月のような子は、わたしみたいなイレギュラーと関わるのが、ちょっとした非日常体験なのかもしれない、と蓮は思った。

「必要な物は持って行けばいいが、そう慌てて片付けなくてもいいぞ。俺がここに居る限り、いつでも自由に出入りしていいからな。」

「それはそれは、ご親切に。」

「ついでに、留学中もしものことがあったら、ここにおいてある物は全て寄付するって、一筆書いておいてくれ。売り飛ばせば酒代ぐらいにはなるだろうからな。」

「わたしのエクソダスが、どうしてそんなセコい話のオチになるのよ。」

心配しなくても描きかけのやつは、ぜんぶ仕上げて画廊に引き渡してから出国するからね。後に残るのは、絵筆と絵の具ぐらい。酒代にもならないわよ。」

昔から、大口叩くのはこいつの十八番だけど、今だったら本当に仕上げてしまいそうだな、と門馬は微笑した。

蓮は、話はこれぐらいでいだろうというふうに、もたれていた柱を上半身で押すと、腕をほどいてぶらぶらとアトリエの方に向かった。

アトリエの片隅に、絵の具を乾かしている数枚のキャンバスが立てかけてある。そのキャンバスと蓮の間で、現役生たちが、思い思いの方向に立てた、まだ

何物にもなっていない壁に向かって、己の想像力と格闘していた。

蓮に気付いて視線を向ける者もいれば、ひたすら描線に集中している者もいる。

さしずめ、プリマの登場ってところかな、と蓮は冗談ぽく自賛した。

こいつらを仕上げないで、飛行機に乗るわけにはいかない。駆け出しの画家が、我がままと聞いてもらうために最低限やらないと行けない事だろう、これは、と自身に向かって戒めを唱えた。

あたしは、彼らとはもう、本当に違う世界の人間になるのだから、と。

こういうとき、”秋晴れの好天に恵まれて、”なんていう常套句で挨拶するのかな。

”常套句”って、なんだかどっかの街を思い出すんだけど、聞くたびに。どうでもいいことだけだな。

「これってさ。」

「ん？」

「なんか、意味無くね？」

それって、開会式そのものを指して行ってるのか？それとも、校長の挨拶のことか？ひょっとして体育祭のことか？あまりにも抽象的すぎるぞ、西島。

「オリンピックだって、開会式しか見ない人もいるんだから。こういうイベントに儀式っぽい物っているんだよ、きっと。」

「オレ、開会式すら見ないヒト。」

”見ないヒト”って、、、ヒト科ヒト属ヒト種”開会式すら見ない”ヒトみたいな言い方だな。

「いつ始まって、いつ終わったかも知らねー。」

僕も殆どみないけど、オリンピックがいつ始まって、メジャーな競技の出場者と成績は知ってたぞ。なんでかっていうと、小中学生のときは、テレビ相手にご飯食べてたからな。ときどき、コメントに突っ込んでたし。CとかDとか、感動以外の感想言ってみろよー、とか。

「西島って、運動会嫌いなのか。」

「ああ、オレ、運動苦手のガリだったから。アホなくせに体育だけ得意なやつが、我が物顔で競技に出るのとか、ウザかった。」

そいつらきっと、授業は座禅なみの苦行でしかなかったんだぜ、きっと。

「中森は？」

「オレ小学校の時は転校繰り返してたから、運動会無い年もあったし、中学のときもそんなに足早いってわけでもなかったから、単にイベントとしてこなしてただけ。好きも嫌いも無かったな。」

「陸上部なのに？」

そうなんだよなあ。みんなそういう期待の目で見てくれるんだけど。

「オレさ、短距離って一般人よりちょっと早いかなって程度なんだよ。
だから、今回もリレーとか出るけど、多分みんなが陸上部って言うのに
期待するイメージほど早くは無い。」

「ふうん。基準で、人それぞれ色々あんのな。」
「だな。期待されない事が羨ましい時もあったさ。」

僕の黒歴史、と言っても過言ではない。

「西島、何出んの。」
「開会式。棒倒し。閉会式。」
「嗚呼、。。。」

「フォークダンス無いだけマシだ。」

あー、、、やなこと思い出させるな。朝っばらから。

開会式がつつがなく終わり、ほぼ自由解散方式で僕たちはクラスで仕切られているテントの下に帰った。思えば、どうして去年はあんなに情緒的に高ぶっていたんだろう。

まるで、26時を過ぎて聞いているラジオで、リクエストが読まれる時のように。

この例えは、止めておけば良かった。

まるで、午前4時にテレビでサッカーワールドカップの中継を見ている時のように、、、は、そんな感じなのだろうか。見た事が無い僕の、全くの想像なんだけど。

夜中に”うお〜”とか歓声あげるのやめようよ。普通に近所迷惑だし。

やっぱり、一度死んだからかな。

千冬とはクラスが分かれたせいで、過保護、猫っかわいがり、といわれた去年のような状況には無い。特に去年の今頃は、ほとんど46時中隣に座っていたといっても過言ではない状況だったけど、テントも別だし、彼女がいま何をしているかなんて、殆ど気にもしていない。

いや、時々は気にしてるけど、してもしようがない事の一つだと言う自覚はあるのであって、、、まあ、いいや。

そして、1年経ったから、ということ以上に、あの日以来ちょっと変わったっていうか、僕と千冬の関係が冷えたって気がする。

具体的に何がどうってというのは、分析なんて出来ないんだけど。生活上は何も変わらなくて、一緒に家を出て、学校に行って、可能であれば一緒に家に帰る。

夕飯を作って一緒に食べて、会話して、風呂には交代で入って、会話して、それぞれに勉強したりして寝る。そのあたりは全然変わらない。

でも、何だろう、、、執着って言うのが当たっているかもしれないんだけど。それが、薄れているような気がする。

可能であれば合わせる、というのと出来る限り合わせる、っていうものの差みたいなものかな。

それは、落ち着いて来たというよりは、冷えたって言う感覚が当たっている。世間で言う、結婚も3年経ったらっていうのとはちょっと違うんだけどね。いや、知らないんだけど。

あの日がなかったら、千冬は今年もまたあの重箱弁当を伊佐さんとともに作ったろうな。でも今年は、ごく当たり前のように、僕と彼女自身の胃のサイズにあった弁当を用意しただけだ。

それはそれでいいんだよ。ああいう大騒ぎはそう何度もやるもんじゃない。こう言う微妙な変化が、あきらかにある一日を挟んで起こっているって言うところが気にいらないんだ。

”その、、、何かあったの？” って、無神経に聞くのも憚られる。だから、余計に気になる。もし聞いたとしたら、おそらくあの独特な目つきと、辛辣な小言で僕は切り刻まれるのだ。うう、、、恐ろしい。

そして、その次の日から、瑞江の機嫌が妙に良さげなものも。

まあ、間違いなくそれらが関連してるって言うのは、いくら鈍感な僕でも分かるし。その原因が僕にあるっていうのも分かっている、そこが、特に、ちょっと、気にいらぬ。

”男女100m走に出場する選手は、入場門前に集合してください。

続いて、1500m走予選に出場する選手は、退場門前に集合してください。”

文科系クラブで体育祭で存在感があるのって、放送部ぐらいのもんだな。

どれ、ひとつ様子見に行ってみるか、ってノリで来てみたんだけど。ヒマなんだよなあ。高校の体育祭って。全員並んで100m走、っていうのもないし。綱引きもないし。午後のクラス対抗まで出番ないし。

「げー！中森 1500出ないんじゃないのか。」
なんて、顔見ただけで乱射してくるの止めてくんないかなあ。

「出ませんよ。今日は、部の後輩の応援に来ただけっす。」
って、いちいち弁明するの面倒くさい、、、なんで、僕の顔知ってるんだろ。指名手配とかされてたっけ。
僕の知らない間に、掲示板に顔写真張られてたりして。1500m手配中とか。

いたいた。
うわ、なんか、牛の群れに紛れ込んだ子犬みたい。

「あ、センパイ。来てくれたんですか。」
「どう。朝メシちゃんと食って来た？」
「当然ですよ、って。先輩変な事聞きますね、わざわざこんなところ来て。体育祭ぐらいで、別に朝から緊張とかしてないですから。」

そうかな？ 変なこと聞いたかな？

「周りでかいのばっかりだから、潰されないように気をつけろよ。」
「大丈夫ですよ。危なくなったらキャーって叫びますって。もちろんそれは最後の手段ですけど。」

前代未聞だなそれ。ちょっとそのシーン見てみたいかも。
もちろんその時点でレース中止だな。

「言わなくても分かってるだろうけど、、、」
「先行逃げ切り。」
「あーんど、」
「予選1位通過。」
「そ。」

「先輩、去年は、ながして3位だったそうじゃないですか。」

誰に聞いた、、、って、どいつもこいつも、おしゃべりなんだから。

「去年の今頃って、まだ陸上に復帰してない時で、まとまった距離走るのが
久々だったんだよ。走り方思い出すので精一杯。」

「先輩、結構キリギリス派ですもんね。」

「努力もしてるぞ。」

「じゃあ、アリギリス。」

オレを魔界生物にするんじゃないねえ。

「ぶっちゃけ、津田に1500mで勝つのは無理だ。でも、津田以外ならその可能性も無くはない。例え予選とは言え、女子がトップとるって、スゴク無い？」

あれ、なんだそのピンと来ないって顔。

「うーん。わたし、ちゃんと部長に勝つつもりなんですよねー。」
なんだとー！

「だから、正直予選はあまり、って感じなんです。でも、センパイがそういうんだったら、予選も気合い入れます。1.5Kも3Kも距離的には大差無いですからね。」

「おまえ、大物になったなあ。」

「いやー、中学のときのセンパイに比べたら、まだまだですよ。わたし、大会役員に楯突くなんて暴挙、いまだに出来ません。」

ぐはっ。みぞおち入った。やなこと思い出させるな。

「あれは大物じゃなくて、大バカ。」

「ですよー、、、あつ。」

なんだ？

「いたいた。わー、やっぱり本当に出るんだ！」

「結構、冗談かと思ったのに。」

ん、クラスメートかなんかか、この小童共。夕方の時代劇の見過ぎだよな、オレ。

「みなさんのお陰でここまでこれました。応援よろしくおねがいしまーす。」

「どこのインタビューだよ、こらー。」

そっか、人気者だな、比呂。よかったなー。

「ねえ、このひと？ 例のSセンパイって。」

S? オレのイニシャルのどこに”S”がついてる? そしてその流し目。

「あ、あ——！ それ言うなミケー。」

「うわ、そうなんだ。へえー、もっと鬼コーチみたいな想像してたけど、全然違うー。」

鬼コーチ? S? ひょっとして!

「センパイ、わたしセンパイのこと”ドS”とか、そんなこと一切言いませんから。ただ、夏休みによく吐くまで走らされたとか、途中で土砂降ってきて他のクラブが中止しても、こちらは最後まで走りきってたとか、、、」

くー、、、全部事実だ、、、否定できねえ。

「駄目ですよ、Sセンパイ。ヒロは女の子なんですからね。こんな危険な野獣の中に放り込んだら駄目じゃないですか。」

「オレは中森、Sじゃない。」

「いや、わたしらの中で定着しちゃってるんで、愛称ってことで。」

「うんうん、この見た目とのギャップがいいよねー。」

だめだ、こう言う時は、もう何言っても逆効果にしかなんない。

「はあ、、、じゃあな、ヒロ。テントの陰で応援してっから、頑張れよ。」

戻ろ。

「帰っちゃった。言い過ぎたかなあ。」

「ごめん、ヒロ。邪魔した？」

後ろ姿やばいー。あれ、ちょっとへこんでるなあ。あとでフォローしとこーっと。

「センパイ、ああ見えてシャイだから。多分”S疑惑”そのものじゃなくて、雰囲気になえられなくなったんだと思う。」

「えー、なにそれ。」

「自分の事をヒトにどういうわれても、あんまり気にならないみたいなんだ。でも、女の子相手にするのって、結構緊張するみたい。わたしに向かっては”オレ”なんて言ってるけど、それもちょっとどっか、無理してセンパイぶってるようなところあって、時々笑える。」

って、こんなところで聞き耳立ててる人もいないだろうけど。ガールズトークになっちゃってるぞ。

「へえーそうなんだ。」

「惚れてんだなあ、ヒロ。」

こらこら。こんな時にする話か、それ。

「それさ、ちょっと意味が違ってると思う。」

あー、わたしのバカ。話にのってどうする。レース前だっつーの。

「え、なにさ。」

「センパイとは、2人でお茶したいとか遊園地行きたいとか、そういうんじゃないんだ。センパイと一緒に走りたいたいだけ。だから本というところ、こう言うレースとか、大会とかもあんまり興味ない。」

嫌いじゃないんだよねー、こう言う話。

「じゃ、なんでエントリー？」

「そのために、一緒に練習してくれるから。」

つか、自慢？ のろけ？

「げ、その運動部脳にはついていけんわ、わたし。」
カホのその見た目と発言のアンバランスにもついていけないよ、わたし。

「で、好きなんだ。」

「うん、走ってる時は独り占めって感じ。」

「そりゃ、早くなるわな。」

「ついてけ無いと、置いてけぼりになっちゃうから。」

ミズエばばあの視界に入って、邪魔してやるんだ、って呪いもちょっと入ってたりした。どっかから見てるの、知ってたんだあ。中学生にして、早くもオナナの燃え上がる嫉妬を知ったわたし。

そして、センパイの優しさに甘えて、センパイを翻弄しようとする彼女が大キライだった。

「タオル持ってたたりとか、ジャージの上着、ハイってわたしたりとか、最初すごく照れてたのが可愛くて可愛くて。」

「あー、、だめだこりゃ。」

なに、その、腕組んで頭フルフル。

「クラスの男子で、ヒロの事好きだっただけの居るんだけど。」

「ふーん。」

何考えてんだろ。つか誰？

「1人、2人じゃないんだけどね。」

「へー。」

見てくれかなあ。性格なんて分かるわけないしね。バカじゃないの。

「ヒロの基準で。」

「そ、ご期待の通り。わたしより早いヒト！」

「つまり、1500でわたしを抜いてみろ！ってか。」

「イエス。」

センパイに言ったらどんな顔するかな。ああでも、“ふーん”、で終わっちゃいそう。それはショックでサッド。

「カッコ良すぎるぜ、ヒロ。一生独身でいろ。もしくは、わたしがヨメにもらってやる。」

なんか、まとまったんだか、なんなんだか。

100m終わった。

ボクの場合、加速しだした頃が100mのゴール地点で感じになるんだよなあ。だから、今日のリレーも気いつけないとスピードに乗る前にゴールしちゃいそう。

半周手前からスタートさせてくれないかな、、、バトンリレーできないか、それだと。

”1500m予選A組に出場するみなさんは、スタート地点まで入場してください。”

いよいよだな。

S疑惑、、、疑惑のSコーチ、、、なんてこった。電車の中釣りの、週刊誌の広告にでも書かれてそうなタイトル。しかもくろ太文字で。

”位置について。”

ヒロは、と、、、アウト側に並んだのか。インだと飛び出せなかったときに、集団に埋もれてしまうからな。それはそれでよし。

「おい、あれって。」

「うちの部の1年。」

他の連中も気づき出したみたいだな。っていうか、あっちこっちがざわざわして来てる。誰が出るなんて、自分のクラス以外分からないものな。

「女子、、、だよな。」

石野、お前のパソコン脳が2.7GHzで励起しつつあるのが、見えるようだぜ。今年もこいつと同じクラスで良かったよう。石野がどう思ってるかは知らないけど。

「女子って出ていいんだっけ。」

「そんな制約は無い。でも、過去に出場した人はいなかったらしい。古い先生の記憶の範囲でだそうだけど。萌えるか。」

「あとで、可及的速やかに”くらのすけ”と連絡とらないとな。」

ん、ああ、大石のエイリアスか。

「100円/枚だな。」

「カネ取るのか！」

「肖像権というものがあるからな。それに、去年、インチキ占いに金取ったろう。」

「くっ。」

写真部に50円、陸上部に50円でとこかな。写真部も、文化祭前にプリント用紙のいいの買いたいとか言ってたからな。この著作権ビジネス、案外いけるかもな。

「今年もやるのか。」

「ふっ。今年はさらに干支の優位性というのを加えてだなあ。」

「そんなのいいから、オレと千冬が行ったら100%っていう結果出すようにしといてくれ。それで上機嫌になるから。なんなら画面のハードコピーでもいいぞ。」

「来るのか。」

「売り上げに貢献してやるよ。」

いや、今の雰囲気だと行かないかもしれないな、今年は、、、。

”ヨウイ”

ぱーん！

う！ 声援が黄色い！ 特に1年のあたり。女子が前のめりになってる！
1500では前代未聞かも！

で、ヒロは。

ああ、、、なかなか先行させてもらえないか。
なんだかんだ言っても男子の足だもんなあ。
後のこと考えないで飛ばせばヒロだって置いてかれるかも、だな。
最初は、5人集団の最後尾、ちょっと外側か。

最初のカーブ、、、そしてうちのテント前、、、っをを、いい顔。
狙ってる顔だ。

「かけー！」
だろー。200円でも行けそうだな。

”1年6組 久坂比呂さん。小さな身体で先頭集団について行ってます！”
いいぞ、放送部。もっと盛り上げろ。

1年テント前通過。応援すごいな。

カーブ二つ目。ちょっとバラけて来たか。つられてあんまり離されんなよ。

”1週目 トップは3年2組 サッカー部 谷田さん。2番手 3年5組 バスケ部 菅原さん。
3番手 2年9組 剣道部 荻野さん。
そして4番手はなんと、 1年6組 陸上部 久坂さん。 あと4週！”

カーブ三つ目。来た来た来た。うん、まだ余裕ある顔してる。くっそー、なんか走りたく
なって来たぜ。
足音すげー。

「すごいなああの1年。」
石野興奮し過ぎ。

「ねえあの子？ 中森くんの隠し子って。」

浅尾さん、それわざとだよね、わざと。

「中学のときからの、ずっと後輩。」

「すごいね。もう、むちゃくちゃ興奮するんだけど！」

「実は僕なんて、もう心臓バクバク。」

「うわー、可愛がってるんだ。」

カーブ四つ目、スピード落とすな。外からかぶせて抜け！

”2週目 トップは3年 谷田さん。2番手3年 菅原さん。3番手 1年 久坂さん。
そして4番手2年の 荻野さん。 あと3週！”

こっからが苦しいぞ。先行組は地獄が待ってる。
600mぐらいはなんて事無いんだよ。最初の勢いだけで走れる距離だから。
でも、普段から走り込んでない奴は、足が上がらなくなってくるんだよな。

トップ走ってるの誰だっけ？ 顔が鬼になってるぞ。
ヒロも、、、さすがに、あんま余裕無いか。練習じゃ、ずっとこのスピードは
ないもんな。
耐えろヒロ。食らいついてけば、お前だったら最後に抜ける。

”4週目 トップは3年 谷田さん。2番手3年 菅原さん。
3番手 1年 久坂さん。
しかし、後ろとの差が小さくなってきました。 あと1週！”

「やっぱ、限界か。」
うっせー石野。
「3位でも決勝すすめるんでしょ。」
そうだけど、、、そうなんだけどなあ。

「それって、やっぱ悔しく無いか。」
「でも、1年女子だぞ。」

いや、このまま後ろの集団に飲まれるとか、あり得んだろ。
それじゃあ、このレースに出した意味がないんだよ。

くそっ！
ちょっとどいて、どいてくれ。前に出させてくれ。

「ヒロッ！」

親指上！だ。

を一、返してきやがった！

”1年久坂さん、果敢に上がって行きます。

いま2番手をとらえて、、、抜きました。菅原さん顎が上がっています。

そしてさらに1番に迫っています。

いま、目の前でものすごいことが起きようとしています。

1年テント前通過、盛り上がっています。下克上です。トップに並びました。

谷田さん逃げ切れるか。久坂さんこのままだとアウト側で不利です。

ものすごいスピードで最終コーナーに突っ込んで行きます。”

どうすんだヒロ！

”久坂さん遅れた、谷田さん一歩リードしてコーナーへ。”

なんだとー。

”あ、谷田さんアウトに膨らんだ。その内罅を久坂さんがすり抜けて行く。

コーナーを曲がりきればゴールだ。

久坂さん先頭です。

谷田さん足を使いきったか、急減速。

久坂さん 1位でゴール！”

はあ—————。

やれやれ。2度と他人の応援なんて、するもんか、、、なーんてね。

燃えたなあ。自分で走ってるときは全然なのにな。グリコーゲン使い切っちゃったかも。

”1年テント、半狂乱ですね。実況の秋田さん。”

”当然でしょう。予選とは言え1年女子が1位ですからね。”

”今のコメントで、1年テントさらに盛り上がっています。”

”予選B組 まもなくスタートです。”

”こっちはどうなるでしょうか。”

んなもん、津田が勝って終わりに決まってるでしょうが。

ちゃんちゃん、と。

予選A組の盛り上がり比べて、あまりにも普通のB組の予選が終わって。そのあと、棒倒し、障害物走、午前を締めくくるクラブ対抗リレーがあって。

ちなみに、我が陸上部は、大人の事情によりクラブ対抗リレーには出場しない。だから、本当に、午前中は流れる雲を見上げるのと、石野と競技に突っ込み入れる以外は何もする事がなかった。

まあね。強豪校でもなんでもないけど、陸上部が本気出してリレーしたら、1週追加されても勝てるよ。

さあて、楽しいお昼の時間です。

千冬はこっちに来そうに無いし、誰と食べるかなあ、、、石野どこ行った。

「ナカモリー。」

を、澤村くんじゃないですか。

「チームでメシ食おうぞ。」

チーム？ ああ、リレーチームね。

「いいね、それ。同じ釜の弁当ってやつ？」

ということは、紀野っちも来るの！

「極力、足引っ張らないように頑張るけど、陸上部2人で稼いでね。」

「岡田さん謙遜？」

「一応、タイム的にはうちのクラスでは紀野ちゃんの次ぐらい。」

へー、じゃ結構いけるんだらうな。

「あー、ごはん時に中森の顔なんか見たく無いー。」

来たー。そしていきなりショートボディ炸裂。

「紀野ちゃんもしつこいよ。」

「だってさあ、中森ってさぼるくせに、美味しいとこばっか持って行くんだよ。

そんなだと、努力しか無い普通人が可哀想じゃん。」

え、え——、そんなの自覚ないし、ボクのせいでも無いじゃん。

「まあまあ、座れって。」

? でもなんで来たん ?

「一応クラスの期待背負ってるし、出るからにはいいところ行きたいし、終わったら”わっ”て騒ぎたいじゃん。だからもうちょっとチームっぽくしたいわけよ。」

そっか、澤村ってバスケだからチームって言うのに一家言あるわけだ、ボクとは違って。

「今のままだと、ホームルームで手えあげて、集って、走るだけって感じだろ。それだと運動会の為のエキストラにしかなんない。」

なるほどなあ。そんなもんだと思ってたけど、そうじゃない考え方もあるのか。

「弁当でも食べながら、作戦でもねって、同じ目標感もって走りたいわけ。」

うーん、作戦とか、遅きに失した感じが無きにしもあらずだけど。今日の午後だもんなあ。

ま、やらないよりはマシか。

「陸上の2年で、短距離強いのは誰？」

うーん？と。

「石本くんかなあ。2年は100いなくて、彼、わたしと同じハイジャンなんだけど。対抗戦とかでは100も走ってる。」

「中森より早いのか。」

「あー、うん。コンマ5ぐらい早かったと思う。オレ、ロングの練習ばっかしてきたから、100m以下って世間の期待値ほど速く無い。」

「えー、それじゃアンカー勝負とか、だめなのかあ。」

ごめん岡田さん。

「一応、この一週間ぐらいはスプリントの真似事してたんだけどなあ。」

「そんなのやってたっけ！」

紀野さあ。極力ぼくのこと見ないようにしてただらう。

「ヒロにタイム計らせて。20mのダッシュを二十本と、100を十本ぐらい。

そのあといつものヒロとの追っかけっこ。」

「お前、どんだけ走るの好きよ。」

笑うなよ。

「成果でたの。」

「面目無い。コンマ3ぐらいは縮まったと思うけど。」

「だったら、前で貯金作らないとだめってことねえ。石本くんは何組？」

「1組。」

「女子で速いのって誰だろう。」

「直線だったらわたし。」

「直線だったらって？」

「去年のリレー、コーナーで相沢さんに抜かれたの。短距離で曲がる練習とかやんないし。」

「あいつ、身体のバランスの取り方が上手いんだよ。重心移動って言うのかな。バレーやってたのと関係あるのかな。」

「中森くん、知り合い？」

「うん。今度駅伝一緒に走る。」

「あー、あの、“信じられない光景があ！”・・・てやつか。」

ぎゃああああああ。

「あはは、刺さってる刺さってる。」

「だったら、石本くんも同じだと思う・・・。」

はい？

「直線だったら石本だけど、コーナー絡めば中森ってこと？」

「うん。わたし、競技場で見ただけで、10K走ってあのスピードは無いって。特にコーナーのスピード。なんかカッコ、、、」

「カッコ、、、？」

「なんでもなーい。」

「アンカーまでに差を付けられなかったら、なんとかなるかもってことか。」

それって、

「やっぱ優勝狙う？」

「もち。そのウイナーって、例の妹の手作り？イッコもらっていい。」

だよなあ。目標優勝かあ。

「ああ、取って取って。」

「高校生で、タコさんつーのも珍しいなあ。」

「それ、オレの主義だから。ミートボールくれろ。」

「ははは、へんなやつー。」

「じゃあ、わたしらもなんか交換しようか。定番で卵焼き？」

「うん。それ、だし巻きっばいね。」

「わたしのリクエスト。運動会だからね。」

「違うって。体育祭。」

和やかになって来た。澤村偉いなあ。。。そうかあ。

「コーナーって言えば、1500の予選凄かったなあ。あのちっちゃい子。」

「うん。ちょっとビビった。」

紀野っちが？ なんで？

「ラスト1週で、2位を抜いたのはスパートかけてカづくで抜いたって

言うことなんだろうけど、1位抜いたのって、あの子駆け引きしたんだよね。」

「それって、どういうことなの？」

「ヒロはアウトを走ってて、コーナー手前で1位に並んだでしょ。

そこでもう一回ギアあげて抜きにかかったんだけど、抜けなっくって

そのままコーナーだとアウト不利になる。なんだかんだ言っても、

男子のスパートって速いし、下手すると、外にはじかれるからね。」

「ああ、ちっちゃいからなあ。」

「多分、一瞬の判断でギア落として後ろについて、相手が曲がりきれずに

アウトに膨らむのを狙ったのよ。3年のヒト、足、大分来てたみたいだから。」

「で、インに割り込んでスコーンてか。くー、解説ありがとう紀野サン。」

ボクもあのとき、どうするんだろってヒヤヒヤした。

「中森だったら、そのままアウトからオーバーして行くんじゃない？」

「うん。オレ、器用さにかけるから。」

「へえー、そうなんだ。お前って小細工しそうなものにな。」

おいおい。

「だって、その方がカッコよくね？」

「中森のそういうところが嫌い。」

わっはっは、て、そこ笑うところ？みなさん。

「でも、中森には謝らなきゃ、、、。」

「え、なに。」

「わたし、中森がヒロを出すって言ったとき。ほんと、ふざけたやつだなって思ったの。1年女子をレースに出すなんて、単なる受け狙いじゃんって。」

もちろん、それもある。

「でもさ、目の前であんなの見せられちゃうと、、、。ちょっと考えたんだけど、あんな駆け引きって、中森教えられないよね。」

「想像もつかない。先行で逃げ切れってしか言ってない。」

「うん。あの子、とっさに考えて、判断して、実行したんだ。中森が経験積ませたいって言ったのこういう事なんだろうなって。」

「想定以上の成果だったけどな。」

ん、紀野っちマジ顔。

「ねえ、中森ってどうしてあの子だけそんなに可愛がるの？」

は？

「他の1年とかさ、可愛く無いわけ？あなたに憧れてる子、一杯居るんだよ。中森センパイと話したいけど、近寄りがたいって遠巻きに見てる子。」

なんですと。

「知らなかった。」

ぶわーはっは、て、そこ吹くところ？みなさん。

「しょうがねーやつだな、っていうかホント自覚無いのなオマエ。ひょっとして、オレが今日の事、どんだけ楽しみにしたのかも知らないわけ。」

なに言ってる、澤村。

「よく、わかんないけど。なに。」

「あー、わかった。ナカモリって、基本”待ち受け”タイプだろ。こいつってさ、メールにはっきりと、”あなたのことが好きです”って書かないと、ぜーんぜん気付かないつか、そういう感情が存在しないって思ってるんだ。」

「あー。わかるわかる。紀野ちゃんがイライラするのもそういうところなのかな。
浅尾さんとか、けなげで涙さそうよね。あ、いっちゃった。」

「えー？ 浅尾さん好きだぞ、オレ。普通の女の子っぽくて可愛いし、
性格いいし、すごい気楽に話せるし。どうせなら、ああ言うヒトが彼女
だったらいいのに。」

「そういや、オマエ彼女いるんだって。」

「うん。」

「どんなヒト？」

って、どこまで話すの？ 体育祭のお弁当会で。それ必要？

「どんな？ うーんカミさん？かなあ。」

「え、そんなに偉大なの？」

「いや、違って。Godじゃなくて、おカミさんの方。」

「尻にしかれてるんだ。」

「全くもって、、、なあ、リレーの話と関係なくね？ この会話。」

「いいじゃん、いいじゃん。」

岡田さーん。そういうノリの人だったんだ。

「澤村は？」

「今はいない。」

「また微妙な発言しやがって。」

「岡田さんわー？」

「うーん、、、ねえ、この話題やめにしないー？」

「なんだそりゃ。ヒトに喋らせといてそれかよー。」

まあ、確かに関係ないわな。

午後の応援合戦が始まって、見ながら思ったんだけど、紀野っちが、
”サボりの中森”って怒るのは、練習をサボるとかそういうことを言ってるん
じゃないんだっていうの、ようやく分かった。

今日、澤村がやったようなこととか、別にリレーの勝ち負けとかに関係なくて、
やらなくていい事だったんだけど。味も匂いもよく分からない、チューブ入りの
ペーストを食べるんじゃなくて、ちゃんとお皿に盛られた料理を食べるもんだろ人間で、
ってことなんだろうな。

ある程度結果残して、二年になったってことは後輩も出来るわけで。
引退して行く3年に変わって部を盛り上げないといけない立場にあるヒトが、
ただひたすらグラウンドを走るだけってどうなのよ、って言いたいわけだ。

ボクの場合、それが一番難しいんだけどな。

「雨来そうだな。」
あ、ほんとだ。雲が広がってる。

「雨とか、言ってたっけか？」
「朝、天気予報で。昼間に見た時も、3時頃降り出しになってた。」

弁当でばたばたしてたからかな。気がつかなかった。千冬傘持ってるかなあ。

”こちらは、体育祭本部です。天候が悪化する模様なので、午後の種目を
変更します。

13:30より、1500m決勝。14:00より1年クラス対抗リレー。・・・。”

その他の競技は中止ってか。

ヒロが、普通以上の力を出したとしても、津田には勝てない。

津田が転んで後続集団、もしくは象がそれを踏みつけて、津田がラン不能にでもなれば、ヒロは勝てるかもしれないけど、、、それで勝っても意味無いんだけどね。

午前中みたいに様子見に行ったら、津田とも顔があっちゃうし、多分今頃は、1年の子達がヒロを囲んでカーカーやってるんだろう、、、って、あからさまにそういう集団が見える。視力はいいいんで。

そういう場に行って、飛んで火にいる夏のなんとか、またしても”Sセンパイ”呼ばわりは避けたい、、、。なんてこと考えてるから駄目なんだよな。そんなの気にするこっちゃ無いんだ。

でも、今回はテントの陰から応援する、ことに徹する。

”位置について”

早いな。雨降りそうだからか。

”ようい。”

パーン！

津田が飛び出して、そのあとをヒロと何人かが追いかけて、最初のコーナーに突入して。

それを腕組みして、テント下最前列で睨みを利かせる”自称鬼コーチ”=ボク。

いけ、ヒロ。最後まで津田に手を抜かせるな。と、目でメッセージを送ってみる。

抜かないよなあ、手。あいつは。最初のうちは軽く流しておいて、これは接戦になるかも、なんて期待を持たせつつ、最後にぶっちぎるとか。

そういうシャレがわからないヤツだもの。

1年のテント、盛り上げ過ぎ。全クラスで旗ふってる。

少しずつ差が開いて行く。津田の独走ってというのが、なんていうのか、単独走って
言いたくなるぐらいに差が開きつつある。これじゃあ、津田もつまんないか。

ヒロ以外は、ちょっとづつモチベーション下がって来てるみたいだな。
津田、10mあってヒロ、そのあと3mぐらい後ろに3位集団。

でも、1年のテント、テンションたけー！

「中森、リレー集合だって。」

「あいよ。」

よし、いきますか。

入場門前に人だかりが出来つつあるけれど、なんとなく全体的に、まだ続いている1500mが気になるふうでもある。

ちょっと気もそぞろとでもいうのかな。

大草原でミーアキャットが背伸びをしているように、人だかりの向こうを伺っているのは、主に1年生か。

いま、津田が。そして、5秒ぐらい遅れてヒロが駆け抜けて行く。

あいつ、顔が、なんか怒ってないか。

練習で走ってるときは、顔なんかみないからな。

なんか新鮮、つか、かっこいいぜ。。

”ヒーっ！”

1年女子か。自分のリレーなんかそっちのけって感じだな。

あいつ意外なスター性があるのかも。

闘志が折れてないところがいいのかもしれないな。

3年テント前、2年テント前、通過して1年テント前。

”ヒーロ！ヒーロ！ヒーロ！・・・”

をー！ ついに、ヒロコールだ。津田ヒールだなあ。

それでも、2年連続1位か。やるな、あいつも。

さすがにスペシャルストを自称してるだけのことはあるな。本気でやって、、、勝てるかな。どうかな。ちょっと、完璧な自信はないな。

”クラス対抗リレーに出場の皆さんは、ゲートから入場し、スタート位置まで移動してください。”

澤村、なにそのにやにや、で、近づくのやめろって。

「負けられなくなったな。センパイ。」

「そう思う？ だよなあ。死ぬ気で勝ちに行かないと、いけなくなった。」
うーん、腕あげて、背筋のばして、ストレッチー。

「よっしゃ、円陣くもうぜ。」

くっそー、なんでもやってやる。円陣でも六芒星でも。

「右手出して。一番紀野、二番オレ、三番岡田、四番中森。勝つぞ！」

「おしっ！」

単なる錯覚なんだけど。

トラックにはまだ、津田やヒロが激走した余韻が残っているような気がする。
そのトラックを横切って、女子は左へ、男子は右へと分かれて行く。

ちょっと、軽く走って身体あつためところ。

いたいた。

「石本おー。何番？」

「オレ、二走。」

げ。なんだと。

「へへー、中森アンカーだろ。前半で余裕つくって、後はブロックでもなんでも
やって、中森の足止めろって作戦。」

「ほ、ほー。」

キタネえー、半周でそれやられたら、抜くポイント厳しいかも、、、でも、まてよ。

「うち、一走、紀野っちだぞ。」

「え、やばっ、同じクラス？」

知らなかったんか。

「おーよ。まいったか。」

「あんなに仲悪いのに？」

それ、関係ねーだろー！
でも、ちょっとツボった。

というようなおバカな駆け引きはさておいて、1年のリレーの間に身体を動かして筋肉をアツためところ。出来れば、一緒にトラック走らせてくれないかなあ、なんてね。

「はあ、はあ、、、あれ、センパイもリレー出るんすか。」
ギンじゃねーか。

「いま、走ったところ？」
「はい。いまんところ、、、はあ、はあ、、、トップです。」

「ペコは？」
「いまあっちで、トラックに並んでますよ。。。そっかあ、1500出てなかったですもんね。あ、来た。よし、まだ1位。ペコ、転んじまえー。」

「友情も何も無いな。」
「勝負の前に、そんなの紙くず同然。 オオエ頑張れー！行けー！オオエー！」

”さあ、第4走者にバトンが渡りました。5組リードのまま最終コーナーへ。”

このまま決着しそうだな。

「やったー！ オオエ、優勝だよー！」
「ギーン。」
う、れ、し、そー。いいなあ。

さてと、次はおいらの番ですよ、と。
まだ雨降んなよ。もーちょっとだけ我慢してくれろ、雨雲さん。

”2年、位置について。よーい”

パーン。

よし、紀野っち飛び出した。さすが早いけど、、、圧倒的ってほどでも無いな。でも、とりあえず1番でコーナーに入ってた。
専門じゃないから、なんて言ってたけど綺麗な走りだな。

そっか、あのおかっぱ頭。この状態だと結構映えるんだ。なるほど。

なに納得してんだ、オレ。

「第2走者位置についてください。5組、1組、2組、3組、、、」

いま1組と2m差ぐらいか。

澤村スタート、紀野の手が伸びる、よしっ綺麗に渡った、、、
と、石本もスタート。

「紀野っち、サスガ！」

「うん。」

うーわ、澤村も早い方は早い方だけど、やっぱり石本、その上だな。
徐々に差が無くなって来てる。

でも、コーナーまで持ったぞ、まだ澤村が前走ってる。

「ああ、やばい！」

コーナー抜けたところで並ばれた。でも澤村粘ってる。

「よし、オレ行って来るよ。」

「お願い、中森。」

「まかせろ。」

なんて勢いで言ったけど大丈夫か？

ギリギリ、1位か2位かで岡田さん。

で、2組、相沢かあ——！　なんでお前なんだよー。

あのやろ今年は駅伝練習で走ってるから、去年にも増して早くなってるぞ。
いきなり2番手に食いつきやがった。

コーナー抜けたところでまだトップ。でも相沢がすぐ後ろに。

岡田さん落ち着け、後はオレがなんとかする、、、って、テレパシーじゃ
伝わらねー。

「第4走者。5組、2組、1組、3組、、、」

余裕なさそう。

「岡田さん！」って、叫んじゃったよー！　そのまま、まっすぐ来て！

相沢抜きやがった！くそっ。

2組の男子が先に出た。でも、まだだ、ギリギリまで待つ。

相沢が来て、、、今横を、、岡田さん、あと2歩、オレ、スタートっ、、

「ハイっ！」

よしっ、バトンもらった。

どけー、相沢ー！

いま、、、すり抜けるとき、、、ちらっと、こっち見やがった。笑ってやがる。

行くぞー誰だかしらないけど2組の一。

オレは――、コーナーで――、インをつくなんてメンドクサイこと
しないんだよ！

アウトから、このままオーバーテイクだ、こんにゃろ――。

くそー、ならんだまま抜けねー、、、

いやっ、じわじわ、前に出てる、、、はず。オレは毎日10K走ってんだ！

よし、視界から消えて来た。

前に誰もいない。直線。トラックしか見えない。

こっから更に加速して、視界が三角になっていくー、ぬををを――――。

ゴールだ！

「っしゅー！」

はあ、はあ、はあ、、、酸欠――。短距離は短距離で、きついなあー。
うわー、ブラックアウトしそう、はあ、はあ。

「センパイー！」

「おう、ヒロ。1番取ったぞ。で、なんでここにいる。」

きつつー。

「センパイがテープ切るの、近くでみたくて残ってました！」

「1500決勝から？」

「はい。カッコ良かったです。」

「必死だったけどなー。」

「そこがいいんですよー。来年は、1500で見せてください。」

やれやれ。

「わーったよ。」

「澤村一、優勝だぞー。」

「おおー！」

ハイタッチ。

「やっぱ、中森と一緒に走れて最高！」

「おれもー！」

リレー走ってよかったー。

「中森クーン、澤村クーン。」

女子来た。

なんか、ボクたちバカみたいに笑ってないか。

はい、岡田さんタッチ。

紀野っち、、、わ、逃げないんだ。はい、タッチ。よかったー。

「リレーするとき、中森君が、“岡田さーん”て呼んでくれて。」

「ああ、聞こえた聞こえた。」

「思わず胸に飛び込んじゃいそうになったよー。あの中森クンがだよ。」

「言えるー。」

「あのって何、あのって。」

しかも本人の目の前で。

「ねえ、紀野ちゃんもそう思、、、紀野ちゃん？」

「ぐっ、やばい、、、。」

「えー、涙目。どうしたの。」

「だからいま、ちょっとやばいんだって、、、ずずっ、はあ、、、。」

「えー、なにになに。」

「中森が。」

えー、またボクなのー。

「本気で走ってるの見たら、去年の駅伝の事思い出して、、、あのとき、中森がいろんな人の夢を叶えたんだなあって。

今日も最後に逆転してくれて、澤村君も岡田さんも、わたしも凄く嬉しくて。

多分、クラスのみみんなも喜んでると思うんだよ。」

「覚えてる覚えてる。あんとき、朝礼で校長興奮してたもんな。」

「ぶっ！ それちょっと、いまは無し。

中森って、こんなに凄いヤツなのに、なんで素直に生きられないんだろう。

これまでよっぽどの事が有ってブレーキ踏んじゃうんだろうなあ、って思うと、うるっと来ちゃって。」

「紀野ちゃんも、ややこしいこと考えるねー。」

「オレは、中森のそういうところも気にいってる。押し付けがましくなくて、オレには丁度いい感じ。

なあ中森。やる時はヤル。それでいいじゃん。」

ボクは、

「オレは、みんなに感謝してる。去年からリレーやりたくって、アンカーで走らせてくれて、いま、すごく嬉しいって思ってる。」

「あーあ、また美味しいコメントだよー。わたしやっぱり中森キライ。もうこの”中森キライ”っていうの、わたしの中のイディオムになっちゃってる。」

「何言ってんだか、、、あ、その写真係の人。4人で撮ってもらえます？」

「じゃあ、紀野さん、オレ、岡田さん、中森で。」

「ハイ、ミンチ。」

なんじゃそりゃ。

パシャっ！

「紀野っち。」

「うん？」

「津田にさあ、オマエの3連覇は無い、って言っといて。」

「?・・・それって！ マジっ？ マジっ！」

おおマジだよ。いまんところはな。

閉会式の途中から雨が降り出した。

どうだろう……。強くはないけど、そのまま15分も立っていると、シャツまで濡れてしまいそうな雨？

女子は特に、髪の毛とか気になるだろうな。

なので表彰式もそこそこに、もちろん講評なんかもすつとばして、みんなは教室に帰ったんだけど。

僕たち運動部は、といっても運動場を使う運動部ってのに限定されるんだけど、用具の片づけなんかを大慌てで、、、こんなだったら閉会式もやらないでくれたらよかったのに。

ただ、テントだけは既に雨に濡れてしまっているんで、そのまま畳むわけにはいかないんで放置されていて。

付け加えると、テントの屋根を支える金具のところに、スポーツタオルをひっかけたまま忘れて帰ったやつがいるらしく、それも含めて、あれって、いつ、だれが片づけるんだろう。ってことなんだけど。

明日は土曜日なんだけど、、、。

明日練習、、、トラックの外側だからなあ、うち（陸上部）がやらないと困るってわけではない。

だからといって、野球部が困るわけでも、ラグビーが困ることもない。いっそのこと、来年までそのままにしておくっていうのは、どうだろうか。

うーん、我ながらいいアイデアだとは思うけど、現実的には正月が来るまでには、どこかへ吹っ飛んでるだろうな。この高台、ときどき半端ない北風吹くから。。。

北風だよな、きっと。冬だから。

なんて馬鹿なことを考えながら、体育用具倉庫にマットを運び入れたら外からカギをしめられて、女子と二人っきりで閉じ込められた、きゃーどうしよう、なんていうベタなイベントが起こるはずもなく。

教室に帰ったころにはホームルームもあらかた終わってた。

ちなみに紀野っちは、“準備”の方の担当だったので、後片付けは免除。だから、

「遅かったね、中森。クラス対抗リレーの優勝で盛り上がったよ、ホームルーム。」

なんて、きわめて上機嫌でボクに左ジャブを入れてきた後、

「アッキー、帰ろう。」

って、さわやかな声で立ち去って行った。

例の“キライ”っていう定冠詞がなかったってことは、よっぽど機嫌がよかったんだろうな。

やれやれ。

走ったのより、用具の片づけで体力消耗した。

帰る前にちょっと休憩するか、、、どっこいしょっと。

雨かあ。傘持ってこなかったなあ。

体育祭の天気を気にして天気予報見る、なんてことありえないもんな、僕の場合。

いまどきてるてる坊主吊るすやつなんているのかな。そもそもあの、てるてる坊主って、原型はなんなんだろう。

運動会の天気、気にするのって、多分大人だな、、、親とかの。弁当作ったもんか、どうしたもんか、とか。運動会の格好で行かせていいのかとか、、、元母さんは、どうだったんだろう。やっぱり気にしたんだろうか、そういうこと。

窓濡れてて、景色がへんだ。

「おつかれ、中森くん。」

お、浅尾さん。ボクの MARIA 様。なんか、いいタイミング。
ちゃんとスカート撫でて座るんだ。

「後片付けだったんだって？ 紀野さんが、うれしそうに笑ってたけど。」

「いろんな意味で、お役にたてたみたいで。疲労感もひとしおだよ。」

「ふふっ、ご苦労さま。あー、髪とか服とか、濡れちゃってるね結構。」

相沢じゃなくてよかったー。あいつの口からねぎらいなんて、絶対出てコネー。
どっちかっていうと、”わー濡れてる、無様だねー、濡れるから近寄んなよ。”
ぐらい言いかねない。
それはそれで、笑えていいけどね。

「これぐらいだったら、自然乾燥ですぐ乾くよ。夏場の汗の方がひどいぐらい。」

「うわ、きも。」

「きも、とかいうし。」

でも、逃げてないし。

「リレーすごかったね、最後。わたし、応援してたんだよ。」

ナカモリがんばれー、って。キャーキャー言っちゃった。」
へえー、おとなしげな浅尾さんが。

「それ、聞こえてた。」

「えー、もう、またウソばっか。」

かわいいー。

「どんな感じだったの。私、かけっこで1番とかなったことないから。」

「うーん。やったぜーっていうのと、きつつー、っていうのが半々ぐらいかな。」

多分、きつかった分、嬉しかったんだと思うけど。」

「いいなあ、わたしもリレーとか出て、きゃあきゃあ言われてみたい。」

「ほんじゃ来年、一緒に走る？」

「来年で、きっとクラス別れるよ。もう、適当なことばっか言って。」

「そっか。そうだよな、面目無い。」

、、、みんな、意外と忙しそうだな。

“ミキヤス帰ろうぜー。”

“すまん、オレ先輩とカラオケ。オフの日ぐらい解放してくれよな、まったく。”

“あー、塾もオフになんないかなあ。”

“ならねーよ。サボりっていうんだよ、そういうの。”

“食堂やってたっけ。”

“今日は17:00までー。行くの？ミホー。”

“いくいく。なんか、お腹すいちゃって。パン食べたい。”

“じゃあ、あたしもー。”

「いつもと同じはずなんだけど、こういう日って、なんかちょっと違うように感じるのって、なんでだろうね。」

「ふーん、そうなんだ。」

「浅尾さんは、そう思わない？」

「うーん、、、どうかな。どう、、、なんでしょ。」

変なこと言ったかな。ボクが変わってるだけ？

帰宅部の人にはいつもと同じコマかもそれないな。部活無いっていうだけで、じゃあ、この後何しようなんて悩むのって、もう病気かしんない。

”部活喪失シンドローム”とか。

「中森くん、まだ帰らないの。」

「傘忘れちゃって、、、でも、下で千冬が待ってるだろうから、そろそろ行かないといけないんだけどね。」

「相変わらずだね。」

「でもないよ、最近は。けれど今日はオフだって、言ってるから。」

「じゃ、そろそろ行った方がいいんじゃない。」

もうちょっとこのままでも、いいんだけどね。
なんか、顔会わせずらいんだよな、最近。

うん、そうするよ、じゃあね、と彼は言って、バッグを背中に回して教室を出て行った。

この夏の間、彼は何周も何周もこのグラウンドを走っていたんだろうな。9月になって、久々に見た彼は、真っ黒に日焼けして、なんだか小学生のようだった。

うちの学校の生徒は、半分以上がもう受験一本に絞っているようなものだから、彼の日焼けはことのほか目立っているように感じる。

かく言うわたしも、進学予備校の夏期講習に行っ、エアコンが効いた教室で課題と格闘していた口だ。

授業が終わったら、時々アイスクリーム屋さんでだべって、暑い暑いなんて文句を言いながら、コンクリートの舗道の上の自分の帽子の影をサンダルで踏んでいた。

だから、夏休み明けの彼を見たときの衝撃といえば。
“食べごろのアボカド？”

去年は、こんなに焼けてなかったものね。

「あ、さ、お。」
来たー。座ったー。挨拶代わりにお茶でも持ってこいよー。

「なにその、来やがったかこのヤロウみたいな雰囲気。」
「人には、侵されたくない日常があるの。」
「いや、いまのはどっちかっていうと“非日常”だろう。で、何話してたの。」
タナベめ。

「かえろーっと。」
「いま、行ったら、下で見ちゃうよ。」

は、そうだ、、、刺さった――。

あの二人が一緒のところで、なんだか嵌りすぎてて、見るとあーあ、
ってなるんだよね。

「ふっふっふ、痛いところいちゃったかなあ。で、何話してたの。」

一度浮かした腰を、もう一度おろすのって、なんていう屈辱感なの。
しかも低い声で、ふっふっふとかあざとく笑うし。演劇部かオマエは。

あーあ、でも、もういいか。

「いつもと同じはずなんだけど、こういう日って、なんかちょっと違う
ように感じないか”だって。」

「ふーん。詩人だねーカレ。で、なんて答えたの？」

「“どうかな。”」

「なんじゃそれ。文芸少女、アサオらしくない。」

勝手に文芸少女にするな。

「だってさ。こっちは中森くんの席まで行って、前の椅子に座って、
会話するだけでもういっぱいいっぱいなんだよ。耳が赤くなってんの
バレてないかなあとか。

クラスの雰囲気とかもう、どうでもいいって感じ。」

ぷーーーー、バンバン、て、肩叩くな失礼な。

ほんと、我ながら笑っちゃうけど。

「あー、でもある意味羨ましいわ、それ。」

ある意味って、どういう意味よ。

「なにげない会話がさ、いい思い出になって残ってることってあるじゃん。

全然さりげなくないけど。アサオの作為に満ち満ちているシチュエーション
だけど。でも、いつか思い出して、ほっこりするんじゃないの。」

うん。

そのいつかって、いつなんだろうなあ、、、って気はするけどね。

受験と、学校と、予備校と、あまり彩の無い学校生活だけど、いつもみんなとは違う色を放っている中森くんのことを、わたしは気になる。

いつみても、まだ何も決めてないって顔で、こだわりとかなさそうで、飄々としてるように見えるのに、その実は、ひょっとしたらこのクラスの誰よりも、一生懸命生きようとしている気がする。

わたしは、それに気付いてしまった。

「アサオは恋愛感情にはしないって言ってたけど、わたし、何言ってんだこいつ、恋愛感情そのものじゃんて、思ったんだけどね。だんだん分かってきた。」

おっと。

「片思いにせよなんにせよ、恋愛が絡むとそれが破綻した時に、辛い思い出になっちゃう。

でも友人として語り合った思い出って、絶対に色あせないもの。全部がそうじゃ無いかもしれないけど、わたしはそう思うよ。だから、アサオのそれって、意気地はないけどある意味正解って思うよ。」

「二言ぐらい多いぞ、タナベー。」

実際のところ、いっそ何かでばれちゃえばいいのに、って思うこともある。自分でそう告白できない意気地なしが考えそうなご都合主義の展開なんだけど、本当に言いたいことを言えない苦しさって、どうごまかしても消しようが無いんだ。

雨、暫くはやみそうに無いな。

「恋愛は、わたしに相応しい人が現れるまでとっとくよ。あの妹と張り合うような彼女が居る人とは無理。」

だからわたしは、ずっと気持ちにブレーキをかけている。

”傘持ってないんだったら、いっしょに帰ろうか”って、言えなかった事も、
いつか思い出すんだろうな。

よっ、ほいっ、とっ、と。 階段2段飛ばし。
3段は難しいよな。着地点が狭くて。よっと！

「おそーい。」
こわーい。

「待ちくたびれた。」
「用具の片付けが。」
「知ってる。で、そのあと誰に捕まってたの。」

「えー、、、浅尾さん。」
「あー。浅尾さんか、、、。ならいいか。」
よかったー。

「もう、”中森さん、誰か待ってるの？”とか、”中森さん、まだ帰らないの？”とか、
そのたんに、”兄さんがまだ降りて来なくて”とか、”あーそういえば、
体育倉庫に走ってったな”とか”そーなんだあ”とか、、、何人の人と、同じような
会話繰り返したか。」

そんな目立つところに立ってるからだろ。

「いくら愛想のいいわたしでも、いい加減笑顔が引きつるよ。」
「誰が愛想がいいって？」
なんてことは、口が裂けても言ってはいけない。

「すぐ靴履き替えるから。」
人が少なくなったとは言え、まだこれから帰ろーって人たちも、このあたりに
入るわけで。その人たちの前で、こういう会話、、、かなり恥ずかしい。

「はい、傘忘れたでしょう、今日。」
「これって、置き傘？」
つか、置き傘って基本予備の傘だよな。それがなんで、こんなに高そうな
傘置いてんだ。柄とか骨とかが、ちょっと金色っぽいんですけど。そして模様が
また、スカーフのような花柄。

「景は？」

「無い。そういう習慣が無い。」

「どうして？」

「どうしてって、、、改めて言われると、なんでだろうなあ、、、。

あ、基本的に誰かに入れてもらって、、、。」

しまった！

「あーそう。基本的には瑞江ちゃんに入れてもらってた、ってわけね。ふーん。

ま、いっか。」

おや、今日はあっさりしてるな。どうしたんだろう。

「とりあえず、持たせていただきます、傘。」

「当然。」

持ち主の肩が濡れないように、気をつけて。

女性用の傘って、基本小さいからね。まあ、ボクの右肩とバッグが濡れるのはしょうがないな。そんなに強い降りでもないし。

「これぐらいの雨だったら、走った？」

「いや、よっぽどの事が無い限り、そういう事はしない。ずぶ濡れになって、風邪引いたりしたら、家で一人で寝込んでるしかなかったんだよ。そうになったら、身体も心もしんどいから。」

元母さん、仕事休まない人だったからなあ。休まれても治らないんだけどね、風邪なんて。

「そっか。」

学校から下って行く坂道の、歩道との段差のところが川になって水が流れている。今降って来たばかりの雨なのに、少し砂色に濁って見えるのは、このあたりが山を切り開いて作った造成地だってことと関係しているのかも。

「小学校のとき以来だな。」

「小学校？ やだ、そんなの有ったっけ。あの頃だったら、絶対にやらないと思うんだけど。母さんの目が怖かったし。わたしー、忘れてる？」

「ああ、こう言うのじゃなくて。」

本当に傘さしてるんじゃないくて。

「あ、ああ。黒板の！ ぷっ。」

そうそう。ボクがケイタイで撮ったやつ。

「日直、困ってたよねえ。消すに消せない、どうしたらいいのーって。

こどもだったねー、私たち。」

ああ。どうしようもなく子どもだったな。親に振り回されて。

受け入れるしかなかったんだよな、そういう境遇を。

「葦原の街が、雨の中だね。」

灰色にけぶるって言うのかな。

「静かだな。」

自分たちの足音と、雨の音ぐらいだな。普段はもっと、いろんな音が流れて来る気がする。

雨が降ると、街が静かになるんだな。

なんだか左腕がスースーするのは気のせいだろうか。

「くっついたりしないの？」

こういうときって、腕絡めて来たりしそうなものなんだけど。

「して欲しいの？」

わーなんか、やな微笑み。バカにされてるー。

「別にそういうんじゃないくて、いつもだったらそうかなあと思ったんだけど。」

「ちょっとね。自主規制っていうか、できなくなっちゃった。」

、、、いつもながら意味不明な人だな、この人。

「”今回は、わたしの勝ちだね”って瑞江ちゃんに言われちゃった。」

「は？ 何の勝負？」

「例の東京行きのことだよ。」

「勝ち負けとか。」

そう言うんじゃないと思うけどな。

「うん。本来的にはそういうことじゃないんだ。わたしと瑞江ちゃんの間
感情的な問題。」

「ボクを挟んでの？」

「そう。」

「なんかやだな。」

「今の、珍しく本音だね。」

珍しい？ 珍しいかな。そんなことないだろ。

「じゃあ、景。結論出せるの。」

え、、、

「わたしも瑞江ちゃんも、ありえないぐらいの感情のコントロールをやって
今の関係を維持してるんだよ。二人とも景を大事に思っているから。」

それって、

「どっちかを選ぶってこと？」

「そう。そうすれば、“なんかやだな”っていうのは無くなる。

でも、出来ないでしょ、、、。できないんだよ。たかが17歳で、自分の人生を決めちゃうなんて無理。それが分かってるから、わたしも瑞江ちゃんも、敢えては踏み込まないようにしてる。

とはいえ、景ももうちょっと大人になりなさい。

“なんかやだな”なんて。中学生ならともかく、今のあなたが言う言葉じゃないわ。」

いわれちゃったな。

僕が考えなしだ、っていうのは確かに言われる通りなんだけど、でもそれが、全部僕のせいなのかっていう気も、しなくはない。だって、僕が頼んで、好きになってください、なんて言ったんじゃないんだぞ。

でも、”それを言ったら終しまいよ”ってことなんだろうな。
うん。最低の人間の発言だよそれは。

雨音がみょうに心にしみるぜ、、、っていうか、雨が靴に浸みて来た。この後は、靴下がだんだん冷たくなって、指先が気持ち悪くなってくるってお決まりのパターン。このまま降り続けたら、家に帰るまで乾かないだろうな。

「なに、その親にも叱られた事無いのになって顔。」
「だって、本当に叱られた事無いもん。」
ないな—記憶に。

「あっきた。あなた幼児化してない。まったくもう、本当に、世話の焼きがいがあるわ。
さてと、今日はもう面倒だから、食事して帰っちゃおうか。」

逆らう気力も無い。

「どこで？」
「マルエイの上。」
「えー、ジャージだよボク。」
千冬だってその制服でいいのか？

「そうね、困ったわね。景だけ廊下で食べる？」
「、、、勘弁してください。」
「仕方ないわね。じゃあ、ラ・メール行っとうか。」

ちょっと、傘を持つ左手がだるくなって来た。

「ああ、そうだなって納得したら、なんだか、彼女の目の届かないところで、
こそこそと景に手を出してるみたいなこと、出来なくなった。うしろめたさ
、、、いいえ違う。女の矜持みたいなものかな。
そこまで負けたくない、っていう。」

今日は、いつにもまして、良く語るな。なんでだ？
それと、パスタ突き刺すか、話をするのか、どっちかにしようよ。

いや、どっちかっていうと、話の合間にパスタ突き刺すの止めてくれないかな。
なんか、ボクが刺されてるような気がして、見てらんないよ。
うっ！、、、また刺された。

「だいたいさあ、何よあれ。」
うわー、今度は何だろう。っていうか、よくもまあ、次から次へと
その手のネタが出て来るよな。だんだんピラフの味がしなくなって来た。

「追い上げてトップに並んだと思ったら、なかなか追い抜かないから、
見てるこっちははらはらするし、じれったくって、もう、」
リレーのことか。話とぶなあ。

「思わず”ケイ、いけー！”って叫んじゃったじゃない。しかも2組の席だよ。
みーんな、2組応援してる中で。もうありえないわ。わたしのイメージ丸つぶれよ。」
いや、ボクも必死だったんだけど。

「ちなみに、千冬のイメージって。」
「クール・ビューティ。」

”ぶほっ！”吹いた。

「なによ失礼ね。眉目秀丽、成績優秀、何物にも動じない中森千冬さん、
というのが2組でのわたしのイメージなの。それがもう、、、全部、景が
悪いんだからね。」

全くもって、同意不可能。それはボクのせいじゃなくて、あなたが
持って生まれた性格です。

「でも、かっこよかったよ。そこは褒めてあげる。」

はいはい。

不意に人の気配がした。

もとい、不意に、イヤな気配がした。

「なーにが、カッコ良かったって？」

どうして蓮さんが?! さっきまで居なかったのに。
ん?

そっか。キリさんが呼び出したのか。

キリさん、そのエプロンから取り出したスマホ振ってアピールするの止めて
ください。全然嬉しく無いですから。

今日これ以上、もめネタが増えたら、ボク過敏性腸炎になりそうです。

「景がリレーで1番になったの。それだけ。」

間に挟まれたー。

ハブとマンガースに挟まれた、ヤンバルクイナの気分だよ。この場から
全速力で逃げ出したいのに、足がすくんで動けない、みたいな。

ああ、神様。私に飛ぶ羽をくださいー。

ボクの頭には、すでに死亡フラグが立ってんじゃないだろうか。

キリさんなら見えるかも？

何考えてんだ、オレ、、、。

「景。競争とかやらないんじゃないなかつたっけ。」
っていったあと、向こう向いて、
「マスター、ビール。」
って、ボクが走った話はずつまみ程度の話ですかい。

「こんなボクにも、期待してくれる人がいるの。だからね。一生懸命
走ってきました。」
「ふーん、そっかあ。」
そこへキリさんが。
「ハイ蓮ちゃん、ビールお待たせ。ビールでよかったの？」

「今日はまだ仕事が残ってるから。あんまりいい気持ちになっちゃうと、
絵筆があらぬ方向に走って行っちゃう。それをまた明日こそげ落とすこと
になるかと思うと。」
「大人ってつまんなーい。あ、はーい、今行きまーす。」

キリさん楽しそうだなあ。この店も、だんだんキリさんのカラーになって
来たな。蓮さんみたいに、常連さんのテーブルにお盆置いて、
「乗っけといて。」
なんていって、他のテーブルのオーダー取りに行ったりとかしないもの。

それが普通っちゃー普通なんだけど、キリさんのこの客キライ、とっとと
出て行け見たいな顔も見た事無いし。

「わたしも期待してるよ。3、4年ぐらいたって日本に帰って来た時に、
酒の相手してくれるようないいオトコになっててくれると、ひじょーに
嬉しい。」
「あ、行くんだ。アメリカに。」

そっか、決めたんだ。

「あー、うん。まだアメリカって決めたわけでもないんだ。」
「は？この間は、アメリカに行くかもって、言ってなかったっけ。」

「ラフィエットのオッサンの話は断ることにした。飲み屋の客が留学の

面倒みってくれるなんて、どう考えても話が怪しすぎるからね。いま、大学の担当課と相談しているところ。」

それはつまり、

「どっかに行くって事以外は、な一んにも決まってないってこと？」

「そうだよ、悪かったな、勢いだけで。」

「お金は。」

「なんとかなるっしょ。それなりに稼いでるから。」

きっと、外国行って上手くやって行ける人って、こういう大雑把さのある人なんだろうな。そして、そのうちの大部分は、やっぱり挫折して帰ってくるんだろうなあ。

ん、千冬、なに鞆ごそごそやってるの？ 生徒手帳でも出すつもりか？
ケイタイ？

「蓮さん。わたし、実は画廊の方から或る人を經由して、蓮さんが留学
するって話を聞いてて。」

「ああ、うん。お得意さんには、ひと言ことわりを入れておくっていった
から。それでだろうな。」

なんとなく、妙な緊張感が首筋を舐め回すんだけど。
もうちょっと、フレンドリーな声で喋ってくれないかな。緊張して、前しか
向けない。目しか動かせない。

「或る人っていうのが、国際交流基金の財団の理事をやってるの。」
それって、ひょっとすると、齋木医師（せんせい）のこと？
名前思い出しただけで、苦手意識が頭を重くするんですけど。ずーん、て感じで。

「その基金は、大正時代から続いている、まあ、半分位は留学生の支援を
やっているような財団で、いまも何人かの留学生の面倒見てる。音楽や
科学やスポーツとかジャンルは色々なんだけど、、、と言え、いま
これでなにをしようとしているか、解る？」

ゆ、っ、く、り、と、首を動かして、、、左手にケイタイ。を、ちょっと
上に上げたポーズで、にやり。

で、れ、ん、さ、ん、の、は、ん、の、う、は？

固まってる。ビールのグラス、口に付けたまま。

千冬の親指が、ぴぴぴっと動いて。ケイタイが左耳に。
ちょっとpause。。。

「齋木せんせ。こんばんわ。。。いま大丈夫？飲んでない？。。。週末だし。。。
じゃあ、手短に。
この間の話、進めていただいていいですか。。。はい。それ。。。うん。
景は、今となりに座ってる。。。うん。次の検診の時にでも。。。

じゃあ、行ってらっしゃい。ほどほどにね。」

パタンと閉じて、上半身をこっち向きに。

「オッケー。2、3日したら、財団の方から直接連絡が行くから。
後の事は自分で決めてね。国内だけじゃなくて、留学先でもエージェント
がいて、相談に乗ってくれるから。」

「ってことは？」

「学費はタダ。滞在費もある程度は面倒見てくれる。アパートや物価の
安いところだったら、純粋な生活費はかからないぐらい、って思っ
てもらえればいいかな。」

あ、残りのビール、イッキのみした。カチンと来てなきゃいいけど。

「どういう理由で、そこまでしてくれんの。」
カッツーンて、コップ割れるよ。

「わたしがお金だすわけじゃないし。わたし自身は、電話一本かけただけ。
強いて言うなら投資かなあ。」

またそういう、険の有る言い方するでしょ、この人は。

「キリー、ビールもう一本！」
えー、仕事するんじゃないの、今夜は。

「で、本心は何！」
「ふっふー。目障りな女は、アメリカだろうがアラスカだろうがどこでも
いいから、体よく追い払っちゃえー！」

「このやろー。」
あ、蓮さんそれボクの首。絞めないで。死ぬー。

「3年と言わず、10年でもいいよー。」
「むかつくー。」
ギブギブ！ ぶっ。

「まあ、でも。順番逆だったら本当に絞め殺してたところだけど。今回は他所へ行くって決心したのは、あたし自身だし。多少いびつだけど、お互いの利害が一致したって事かあ。」

「蓮ちゃんビール。それと、腕はずさないと飲めないよ。そこまで面倒見ないからね。」
「おっと。ついクセで。」

ふー、17歳で人生終わるかと思った。何その、怪しい挙動。周囲を伺って、千冬のコップの水をカウンターの向こうの流しにすてて、、、まさか。

「マスターって、こういうとこ結構うるさいんだよなあ。ちょっとぐらいなら大丈夫だろ。」

「ええ、これぐらいならどうってこと。」

おいおいー。

「じゃあ。パトロンの腐れ女の好意に感謝してー。」

「シヨタコンの海外進出を祝って、かんぱーい。」

ぷーって、なんでキリさんが受けてるの。キリさんて、ボクのことそんな目で見てたわけ。

その乾杯の後、蓮さんは、「本当に仕事しなきゃ。」って言って、
なんだか植物性の繊維を編んだバッグを、肩にかけて帰って行った。

「なんでああいう言い方するかなあ。」

「あーら、じゃあ、なんて言えば良かったのかしら。」

それは、わかんないけど。

「お互いの人格を否定しているわけじゃないし。

むしろ、わたしは彼女の絵を認め理解しているし、彼女もそれを知ってる。

これからも彼女は、わたしにいい絵を描いてくれるでしょうね。

お互いいいたいことはあるけど、それを言い合ったところで結末は、
後でイヤな気持ちが残って人生がつまらなくなるだけ。だから、
一発きついのを打ち合って、それで終わりにしたのよ。」

ふうーん。

「八方美人の景ちゃんには、ご不満なわけね。」

そういう言い方って、ないだろ。

「彼女は、大きな賭けに出たんだ。このまま日本にいて、現状を維持して
行くって言う安全策をとるか、戻って来た時には忘れ去られているかも
しれないっていう恐怖と戦いながら、新しい自分を掘り起こしに海外へ行くか。

だから留学先が決まらないで学生課に相談する、なんてまどろっこしい事
やってる場合じゃないの。決まった頃には息切れしてるわよ、きっと。」

そこで一口、ごくりって、おい、それさっきの、、、。

「だから、わたしも一肌脱いだのよ。

財団もね。わたしが関係しているからって、好き勝手やれるものじゃ
ないの。プロフィールやらポートフォリオやら推薦状やらを揃えて、
何人かの近しい理事には直接電話でお願いして、それでなんとか潜り
込ませられたの。

わたし、最近素行が良くないから、ちくりと言われたりするのでも我慢して。」

「いつ、そんなことしてたの。」
全然知らなかった。っていうか驚愕、に近い驚き。

「蓮さんも、飲み屋で知り合っただけだからとはいえ、あっちでは美術クラブの理事なんてのをやってるオヤジは信用出来ないって言うておきながら、電話一本で話をつけたわたしのことは信用してくれた。それでわたしのプライドは満足したのよ。」

「そういえば、そうか、、、。」

確かに、社会的信用という意味では、女子高生なんて無いに等しいものなあ。僕は事情を知ってるから、そうは思わないけれど。

「言葉なんてね、上っ面のことでしかないの。海外へ強制退去させなくても、彼女はもう景と会ってるヒマなんて無くなる人なの。だから、その点に関しては、放っておいても良かったのよ。」

わたしが本当に、そんな馬鹿げた目的の為に、自分の時間を使うとでも思った？」

いや、まあ、うーん？ やりかねない、んじゃないの、あなたって。

「ちょっとそれ、蓮さんの残りだよ。もう、止めた方がいいんじゃない。」

「この程度で、つぶれるもんですか。」

それは知ってる。でも、あんた性格変わるだろうが！

ほら。目が据わってきてる。

「帰ろ！景。健全な高校生が、こんな店にいる時間じゃないわ。」

「オイオイ。こんな店はねーだろー、ほいお水。」

だから全然似てないですって、キリさん。

でも、手間とらせてすみません。

雨、上がっててよかったな。

日中より随分と気温が下がってる。雨のせいかもしれない。それとも、もうそういう季節なのか。ボクたちはまだ夏服だし、世間的にもまだ半袖、半ズボン、、、は無いか。

そっか。もう夏休みって、あと1回しか無いんだ。

「顔、紅いんじゃない。」
夜だとわかりにくいけど、横顔がちょっとそんなふうに見える。

「そうかも。わたし元が白いから、目立つんだよねー。このまま電車のっちゃ不味いかな。」

不味いかなって、全然そんなこと思ってるように見えない。
むしろ面白がってる。

「運動会で、日に焼けましたって顔してればいいんじゃない。」
「それ、どんな顔よ。」

飲むと、言葉遣いから変わって来るんだよね、この人。

”3番線に列車が到着いたします。”

「これで一つ片付いた。」
うん？ 蓮さんのこと？

混んでもいないけど、座れもしないって感じ。ついさっきまでラ・メールで座ってたから、立ったままでいいんだけどね。

”あしわらー。あしわらー。”
「彼女じゃなくて。彼の方よ。」

「彼って、、、ああ、あのオッサンの事。」

「そう。」

この時間だと、サラリーマンとOLと、カジュアルっぽいけど仕事帰りっぽい人、が降りて来る。葦原って大きな町だと思うんだけど、ここから仕事に向かう人もいるんだ。こういうのって、時々変だなーなんて思う事もある。

行ったり来たり、無駄じゃね？ って思うんだよね。そういう僕も地元の高校じゃなくて、此処まで来たりしてるんだけど。たぶん、その逆をやってる高校生もいるんだろな。

「言ったでしょ。彼はカードを握ろうとしてるんじゃないかって。」

「カード、、、ああ、あれのことか。」

「本当のところは聞いてもないからわからないけど、そういう可能性はあった。」

反対側のドアのところにもたれて、立ってしようか。

”扉閉まりまーす。”

「人質か。本当にそうだとしたら、ちょっとお間抜けな気がしないでもないけどね。」

「どうして。」

「拉致、監禁、暴行。そこまでやる気が有って、初めて人質なんて物は成立するんだよ。あのオッサンにそんな根性は無いよ。」

千冬が、

「そうだったかも。」って返答するのに、少し間があった。

「蓮さんが、自分からあのオッサンを蹴ってくれたのはラッキーだったな。」

信号の点滅が通り過ぎていく。遮断機の外側に、自転車にまたがったまま通過を待っている人が見えた。その後ろには白い軽自動車。

「うん、いろんな意味で手間が省けた。」

「でも、、、」

「うん？」

「多分マスターだな。止めろって言ったの。」

きょとん、て。

「そんなに会話したわけじゃないけど、蓮さんには拒否感なかったみたい感じたから。もともとそういうこと、あんまり考えない人だし。蓮さんにそういうことを言える人って、マスターしかいないだろうし。」

ひと駅通過。

なんか、ホームの人がみんなしてケイタイ・スマホ見てるのって気持ち悪いな。この人たち、電車がホームに突っ込んで来ても、何にも知らない

ままスマホの画面見て笑いながら、なぎ倒されて逝くんだろうな。

「あの2人って、親類関係だっけ。」

「親戚らしいってことぐらいしか知らない。姪だったか、孫だったか、
いどこ、、、は無いよなー。」

「まったく、景らしいね。そういうところに首突っ込まないのって。
そこまで他人に関心ないかな。」

「だって、そんなのどうでもよくない？」

「どうしてよ。」

わたしのイライラは、表面上は押さえていたけど、ずっと続いていた。このときは、多分ちょっと飲んじゃったせいで、そのたがが外れかかっていただんだと思う。

景が、わたしに嘘をついた。わたしを見かけたのに、声もかけずに帰ってしまった。それを隠した。

その理由が解らないのに堪え兼ねて、瑞江に聞いてしまった。そして、彼女に敗北した。

それ以来、ずっとイライラしている。だから、つい言ってしまった。

「どうしてよ。人と人の関係って、どうでもいい事じゃないでしょ。」

最悪だ。どうしてこんなこと言ってしまったんだろう。

「ぼくなんて、いまや誰の子供かもわからないんだよ。いつ生まれたのかも、どこで生まれたのかも解らない。でもこうやって、毎日生きてる。それだけで十分でしょ。」

景は、怒るでも無く、悲しむでも無く、たださらりとそれを言ってのけた。当たり前すぎて、いまさら口にすることでもないけれどね。そんなふうにも聞こえた。

強烈な後悔が、闇となって電車の窓から襲って来た。

こんなところで。まさか、いつもの帰りの電車の中なんかで知ることになるとは、思っても見なかった。

そんなものがあるとも知らなかった。でも、何かが足りない、とは思っていた。その最後のひとかけらをわたしは、そのとき拾った。

瑞江が言っていたのは、多分このことだったのだろう。

彼は自分の一番基本的なアイデンティティを捨て去ってしまったんだ。そうやって自分の中心を虚無にしまわないと、親という物との関係を捨て去らないと、関係を断ち切られたショックを、いつまでも引きずってしまう。

6年生のとき、父親とは別居し、母親は他の男に心移した。それ以来、彼は一人で生きるしか無かった。そして母親も家を出て、その父と母とは、血のつながりがないと知らされた。

私はなんて馬鹿だろう。一番そばにいたつもりで、そのことを何もわかっていなかった。

わたしは、ひさしぶりに彼の腕を掴んだ。

景はちょっとビックリして、窓の外から目はずし、わたしを見た。

「ごめん、景。」

「どうしたの。」

わたしは、家族ってよく分からない。景との差なんて紙一重の物でしかない。でもわたしの場合は、それが当然の血筋に生まれ、そうであることもわたしのアイデンティティ。そこは景とは圧倒的に違うところだ。

成長する過程で、有無を言わず解体されて行った彼の環境とは違う。

だから、こんなことを言えるような人間ではないのかもしれない。

本来的には、、、。

でも、彼の空虚を埋められるのは家族しか無いんだ。友人や、恋人や、結婚相手でもない。なにも見返りを求める事無く、相手の事を大事に思える。そういう人が彼には必要なんだ。

「わたしは、あなたのお姉さんだから。お願いだから、わたしには甘えて。

わたしのために、何もしてくれなくていいから。わたしにはちゃんと甘えて。お願いだから。景。」

そして、家族って、血のつながりだけで作られるものじゃない。お互いの事を、家族だって思う気持ちがつくるものだとなんか信じている。

彼のうつろな心を、少しずつ、少しずつ満たして行こう。

瑞江が、恋愛から”恋”の字を抜いてしまうって言った意味が、本当に、やっと、解った気がした。

「わかった。そうする。」

そういった彼の顔が、少し笑って見えたのは、わたしのイライラが納まって来たからかもしれない。

「蒲生の商店街、閉まるの早いよなあ。」

ローカルな駅だけど、この時間でも2、30人の乗客が降りて、改札を出て行った。向かいのホームにも十人ぐらいはいたと思う。

「何か買い物でもするんだっけ。」

「そうじゃないけど、なんつーか。もうちょっと賑わいが欲しい、みたいな。疲れて帰ってきた街に、シャッター降りてるのを見ると、なんか寂し。」

「コンビニは開いてる。あとほら、居酒屋さんみたいなのか。だいたい、制服着た高校生が帰ってくる時間じゃないし。」

とか言ってるうちに、人通りが無くなって来た。

「でも、日本中どこいってもこんなものだよ。こんな時間に賑やかなのは、一部の大都市だけ。それに」

—北海道にいたころにくらべたら、全然此処の方がまし。

「、高校生がセイシュンするには、こう言う街の方がきっといいのよ。」

「いきなり青春とか言い出すし。」

—何言ってるの。あなたって、もろに”青春”で書いてある紙袋かぶってるような人じゃない。

うちのマンション見えて来た。

「そうだ、景。ケイタイちょっと見せて。」

「え、なに？」

「いいから、出しなさいよ。」

「うーん。」

とかいいながらも逆らわないところが、景らしいな。

「変な事すんなよ。ほい。」

「うっわ、ボロ。」

「外見だけだよ。中身は大丈夫。通話とメールはナンの問題も無い。」

「へー、そうなんだ。」

び、び、ぴっと。

「ちょっと、なにしてんの。」
ふふん、呼び出し音なってる。

「でんわ。」
「誰に。」
いや、返さないもん。あ、こら、
「さわったら、さけぶよー。」
「あ、くそ、きたねーぞ、このクソアネキ。」

来た。
”はい、ダーリン。こんな時間にめずらしいねえ。寂しかったのー？”

「キモ。」
”え`だれ？”

「よくそんな恥ずかしいセリフ言えるわね。」
”なんだ、千冬ちゃんか。どうして景くんのケイタイからかけてるの。”
「わたしからだと、とってもらえないかと思った。」
”あー、あー、あー、いい勘してる。で、なに用？”

「あのさ。今日からわたし、あなたのこと瑞江って呼ぶことにしたから。」
沈黙。。。。

”まあ、今更って気がしなくもないけど、、、この間から変だよ、ち、ふ、ゆ。”
それ、オッケーってことだね。
”ちなみに、ちふゆの”ち”は、熱き血潮の血ね。”

「それ、どっち。」
”へ？”

「どっちの血潮。与謝野晶子が僕らはみんな生きているの方が。
返答次第によっては、、、。」
”どっちでもいいでしょ。血しぶきじゃないんだから。ね、ケイくんに代わって。”

血しぶきだったら、コロス。

「代わったけど。」

ほら、エレベーターのるわよ。12Fと、、、うわ、なんか暑い。
むっとしてる。

「ええ、無理だよ、そんなの。」
エレベーターの中でも通じるんだ。へえー。

「駄目だよ、死ぬって。」
この狭くてむっとしてるエレベーターに男と2人なんて、景じゃなかったら
息止めてるかも。

「いや、ゾンビじゃないんだから、、、それはトンビ。何言わせんの。」
ぷっ。
あ、しまった、ちょっと吹いちゃった。

ついた、っと。
鍵は、、、あ、ヤツの右手はバッグ、左手はケイタイ。しょうがないなあ、
わたしが出しますか。
ケイタイしながら歩いてると、隣のおばさんに聞かれちゃうよ。

ん、なに？ ケイタイ？ 代わるの？

「千冬だけど。」
”と、いうわけで。”
全然わかんない。なにが、というわけ、なの。

”またちょっとケイクんに無茶ぶりしといたから、ちゃんと働いてるか、
監視しといてね。”
「どうしてわたしが監視するの。」

”同居人の義務。じゃーねー。”
ぷちっ！

「なにがじゃーねよ、まったく。はい、ケイタイ返すよ景。」
うわ、暑い。

「ねえ、エアコン入れたままで学校に行こうよ。わたし、毎日帰ってくるたびに、
倒れそうになる。」

「だめだよ、そんなの。電気代もったいない。」

マンション自体がもってる熱で、部屋の中がむーむーっと、暑くなってる。
これでスイッチ入ると、エアコンがフル稼働になるんだよね。これって、
つけっぱなしの方が、絶対電気代かからないよきっと。この半端ない音。

暑さ慣れしてる体育会系の、素直に言うことかかない弟なんて、大っ嫌い。

「麦茶飲むー？」

「飲むー！」

なんて、気の利く弟なのかしら、あの子って。キッチン、キッチン、と。

ん、ちょっとそれって。

「景、それ飲んで駄目！ 麦茶じゃなくて”そうめんのつゆ”！」

ぶーっ！